

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回）一日發行
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別換取承認第三五二號
昭和二十九年七月二十五日印刷 昭和二十九年八月一日發行

第二十卷

八月號

淨

土



文

八月號

荷を背負つて馬にのる

暑い夏の日盛り。チリチリと照る炎天の田舎道を、一人の旅人が、重い荷を背にしよつて、馬に乗つてやつて來た。すれちがつた知人が聲をかけた。

「この暑いのに何處へ、そんな重たい荷物など、背負わなくつたつて、馬のお尻にでもものせたらどうです」

旅人は、額の汗を拭きながら答えた。

「いやいや、私だけでも重たくて、馬もつらかろうと思ひましてね。せめて、荷物ぐらひは私が背負つて行つてやりましよう」

まさか、いくらいそぐからといつて、電車の中で馳け足をする人はないだろうが。世の中には、これと似たことを、平氣でやつている人がいくらでもある。鼻の先に、人參をぶらさげられた馬が、夢中になつて馳けるのをみて、笑う前に一應自分をふりかえる必要がありはしないか。

荷物を持つことはよい。人參を追いかけることも、生きるためには必要だ。だが、持つ前に、追いかける前に、立止まつて、考へてみるべきである。自分のすること、していることが、果して、それだけの意味があるかどうか。そして、この反省を更に深くすすめるならば、生きているということ、いかに生くべきかというところにまで行く。ここに宗教の門が開かれるのである。(竹中)

浄土 八月號 目次

日本文學に現はれた安樂世界	中村孝也(7)
九品佛の來迎會	(11)
虫生の鬼來迎	(12)
講話——一言芳談抄	藤井實應(4)
キヤリを唱つて興を添える	村田嘉久子(14)
哀しい供養	木津義彰(17)
衆愚	澁谷賢應(19)
供花	吉田絃二郎(1)
火物語	竹中信常(22)
奈良の大佛と法然上人	中村賢(26)
幽靈	山田隆元(29)
新しい寺——深川長專院の場合	(31)
芝園だより	(32)
寫眞訪問 九品佛の來迎會	(表三)

供 花



吉田 絃二郎

毎年夏が來るごとに庭の片隅に紫陽花が咲く。

二十年も昔、東京に出かけて行つたかへりに買つて來たもので、一つか二つの花を持つてゐた小さいな鉢植のものであつたが、今では二三百の花を持つてゐる。しかし、それを買つて來た人は亡くなつてしまつた。恰度忌日のころ咲きはじめるので、いつの年も忌日の朝、露を帶びたまゝ庭の紫陽花を供へることにしている。そして紫陽花は花の季がながいので、八月なかところまでは佛に

た。

あのころは根岸の里を北にすこしゆけば、三河島あたりまでほとんどさえぎるものはなく、青田にまじつて蓮の花が咲いてゐた。

八月の青い空を仰ぎながら千住大橋を渡れば、橋向ふの葛飾の原からはすがすがしい蓮の花の香がただようて來た。そして早朝の風の薫りにつつまれて花賣る人たちが東京の方へ急いで行つた。

供へることができる。

八月はまだ暑さはきびしいが、露を帶びた秋草を朝毎に供へることができるのでなつかしい季節の一つである。

大正の震災の前のころであつた。まだ千住大橋が木橋であつたところのことであるが、わたくしは、根岸に住んでゐ

車に積んだ花、籠に載せた花、みんな露に濡れてゐた。そして大方は佛への供花であつた。

百日草、蝦夷菊、女郎花、蓮の花、桔梗、姫百合、夏菊、撫子……子供のころ、母が佛にお供へしてゐた初秋の花のすがしさを思はせるものであつた。

わたくしの母は、古い昔の女であつたし、何の學問もなかつたから、かつて一度も子供たちを叱つたこともなく、訓戒めいたことを説いたこともなかつた。

しかし母のやさしい眼と、朝毎に佛に供へてゐた花の印象だけは今もなほはつきりときざみつけられてゐる。

子を教へる世間の賢い母たちの百千の言葉にも増して、黙々として花を供へてゐた母のすがたをありがたく思ふ。

時代も明治のことであつたし、夏のところから初秋へかけての花といへば純粹の日本の花であり、西洋風なものとはなかつた。だから今でも佛へ供へる花として思い出すのは昔、母の手に握られてゐた數種の日本の

草花だけである。

初秋の郊外を歩いてゐて、どんなに絢爛豪華なダリヤや、温室の高價な西洋蘭を見てもさほどおどろかないが、たまたま農家の庭などに、つつましくやかに咲いてゐる蝦夷菊や百日草を見れば胸とどろく。やさしい母の姿がよみがへつて来る。

下谷の幡隨院に伊達保美さんがをられたところ、訪ねて行つたことがあつた。庭の池に蓮の花が咲いてゐたのが古刹の淨域に一層の靜閑なものを感じさせた。伊達さんは哲學者であつたが、若くて示寂された。

蓮の花を見ると、伊達さんのことを思い出す。

根岸の家は路次裏にあつたが、北隣りの家には夏になれば琥珀色のなつめの事が枝もたははにみのつてゐた。またその門前には白い木槿の花が咲いてゐた。

その路次には世間をはばかりて住むでゐるやうな人が多かつた。一人の子を頼りに生きてゆく日蔭の女、監

獄から歸つて來た翌朝まだ暗いうちに起きて長い路次裏の雪をすつかり搔いてくれた男……そのような善良な、そして不運な路次裏の人たちの姿が、白い木槿を見る毎に、想ひ出さるる。

狭い庭をへだてて南隣りの家には若い佛師が住んでゐた。佛を刻む鑿の音がさくさくと格子窓から聞えてゐた。格子窓には紅い鳳仙花の鉢植が置かれてあつた。

鳳仙花を見れば路次裏の佛師を想ひ出す。

「朝かほは下手の書くさへあはれなり」

と芭蕉はいつたが、朝に開いて、夕をもまたず凋れゆく朝顔を見ればまことに無常迅速のあはれさを悟れといつてゐるやうであるが、昔から朝顔を見てもなかなか悟る人は少いようである。

しかし朝顔を見て、しんみりとした氣分になるだけでもありがたい心がけと言はれよう。

暑中御見舞

岩手縣大迫町到岸寺

昆野秀賢

鎮西高等學校長

上田貞雄

靜岡大學教授

石井眞峯

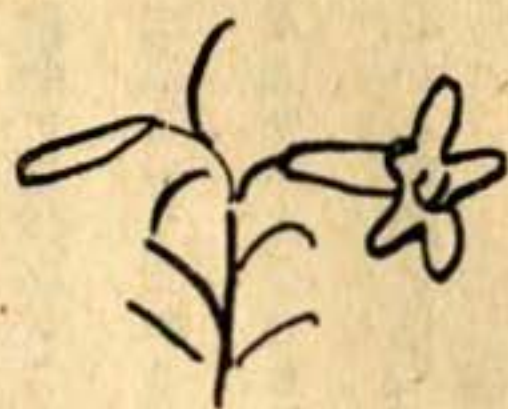
傳通日曜教園

傳通院

傳通サンガ・アソカ
佛青

法然上人鑽仰會

淨土編輯部一同



念佛と衣食住の問題

——「一言芳談抄」講話(一)——

藤 井 實 應

眞實に道を求める人、特に念佛に縁ある人が座右において、常に拜讀すべき書に「一言芳談」という書があります。この書は法然上人はじめ鎌倉初期の念佛者たち二十餘家の言行を簡易に記述したものであります。信仰の理論を述べたり解釋をしたのではなく、また宗派的な觀念で述べたものでなく、これらの人々の深い信仰、熱烈な求道によつて宗教的體驗を得られたそのもの、體驗そのものを卒直に述べられた眞實の言葉でありますから、道を求むる者の魂にひびき來り魂をゆり動かすものがあるのです。「法語」とは「生きる言葉」とでもいうべきですが、この書に述べられた言葉こそ「法語」であると思います。法語だけでなく、その人の行録もあるのであります。實踐こそその眼目であることがうかがわれます。何れも短い文章ですから、どこから讀んでもよく、一句拜讀してはよく味がよいのであります。

この書は誰の手によつてできたかは明かではありませんが「淨土家の三祖然阿上人よりは後で、徒然草を著した兼行より前にあつめたものである」といわれております。それは此書に然阿上人の法語

があり、兼行法師は此書を讀んだといつてゐるからであります。

この書が昔から廣く行われ、多くの人に感化を及ぼしたことは徒然草に兼行法師が「尊き聖の言ひ置けることを書付て一言芳談とかや名けたる草紙を見待りしに心に會ひて覺えしことども」として五條を引いておるのを見ても分ります。同書の三十九段、四十九段は此の書によつて書かれたと思われまゝ。兼行法師の信仰にも影響を及ぼしたことでありましよう。徳川時代にも數種の刊行が行われましたが、湛澄上人は此の書を内容によつて十類に分けて纂輯し、標註を加えて「標註一言芳談抄三卷」として元祿二年に刊行されました。湛澄上人は京都報恩寺に住した大徳で、國書に通じ向阿上人の「三部假名抄の註解」や、法然上人の和歌を註した「空華和歌集」を著した方で正徳二年(一七一二)六十二歳にて寂。これらの書は一言芳談抄と共に續淨土宗全書(八)に一冊にまとめられており、また、一言芳談抄は岩波文庫(昭和十六年刊)からも出ております。

標註一言芳談抄は、その内容によつて、三資、清素、師友、無常、

念死、臨終、念佛、安心、學問、用心の十類に分けて纂輯されてあります。その最初に三資、即ち衣食住のことについて諸師の言行が述べられてあります。

私どもが生活してゆくになくてならぬ生活の資となるものが衣食住であります。中世人であろうと現代人であろうとそのことに變りはありません。しかし現代人は、資本主義經濟の社會であるが爲か、餘りにもこの問題にとらわれ過ぎてゐるのではないでしようか。よく申します、この社會では貨幣を得るということ、もうけるということが目標となり、主力がそれにそそがれるしくみになつておる、だからお金がなくては生きてゆかれぬ、貧乏は苦の中の最大の苦である。貧乏では教育も出來ぬ、貧乏の爲に無理をして病氣になり病氣になつても充分の療養もできぬ。貧乏の故に罪惡を侵すことにもなる。金あるものは幸福であり自由であり威張つてゐる。貧乏には自由はなく不幸この上なしである。哲學者が何と言おうと、宗教家が如何に説こうと結局はお金だ、一にも金、二にも金。地獄の道も金次第というではないか。金を得ることが何といつても一番大事だというのであります。かようにいい、こう考えるのはもつともの事であります。貧乏が罪惡の因となり、教養を缺き、不幸を招く、そうした事實を見逃してはなりません。貧乏をなくすことが、今日の社會問題、經濟問題の主要課題であるといつてよいであります。マルクスはあらゆる文化の中で、經濟がその基礎となることを論じております。マルクスの言うことのすべてが眞理ではないとしても、經濟というものが文化の中でも主要な地位を占めてゐることを教えてくれたのはマルクスのおかげだと、私共も認めねばならぬと思います。そして政治も労働運動も貧乏をなくすることに努

力することはいうまでもありませんが、宗教も亦此點を無視してはならぬのであります。諸の貧苦を救うことは佛の大慈悲誓願の一であります。

しかしながら、貧乏さえなくなれば、理想的な世界が成立ち、極樂淨土が實現するように思つてはあやまりであります。人間が利己心を中心として動き、所有欲に執着する限り、如何に富を得ようと貧富の差は無くなろうと、そこに眞實の幸福は現われぬであります。貧乏を無くしようと努力することは尊いことでもあります、しかし現代人は餘りに營利にとられすぎています。所有慾、我慾に執られるが故に、惱は益々深くなり、それが爲に罪を犯すことにもなるのであります。現代人ほとんど財物に執着を持たなかつたであろうと思われる中世、上代に於ても「學道の者は須く貧なるべし」(道元)とか、「富める者の天國に入るはラクダの針の穴を通るよりも難い」(イエス)とか、「貪りは苦の本」「世の財利をすてたる比丘は寂靜者といはる」(佛陀)とかいう教のたくさんあつたことを見ても此世に生きる限り物なくては生きられず財慾物質慾にとらわれて悩み苦しむものが古來から多かつたことが分ります。しかし、その財慾我慾にとらわれている限り、争は絶えず、悩み苦しみから離れることのできぬのも事實であります。永遠なる眞實を求むるものにとつては、このような我慾中心の闘争世界で満足することはできません。それを離れそれを超えて生きゆく世界を願わずにはおれぬのであります。この時、一言芳談にあらわれた諸師の言葉は現代人にとつて大きな内省の光として味えるのであります。

「明遍僧都云く、穢土の事はいづくも心にかなふ道理あるべから

ず。ただ少難をば心に忍ぶべきなり。たとえば惡風にあへる舟の中にてトモ（體）へ行き、へ（触）へ行かんとせんが如し。」

明遍僧都は三論宗の達者で、後高野山の蓮華谷に隠れて念佛を修せられた大徳であります。此書の安心の部にも、和語燈錄にも勅修御傳十六にも、拾遺古徳傳にも法然上人をたづねられた時の有名な記事がのつております。

高野の明遍僧都が善光寺參詣の事があつたとき、法然上人をたづねられた。僧都が問うていうに、「いかがしてこのたび生死（しせい）をはなれることができましようか」。法然上人の云く、「念佛してこそと存じます。」僧都問う「誠にそう思います。しかし念佛のとき妄念のおこるのを如何いたしましようか」。上人答う「妄念は起りましても本願力にて往生するのであります」。僧都「はい分りました。」とて辭せられました。上人は獨り言のように「妄念をおこさずして往生しようと思う人は、生れつきの目鼻を取り捨てて念佛申さうと思うが如くである」と仰せられたとのことです。

この明遍僧都の御言葉がこの芳談抄の最初にのつておるのであります。そのお言葉の中の穢土とは此の世の中のこと、此の世の中がけがれている世界なることは説明を要せぬであります。少難とあるのは「世わたる方便（たひき）のよしあし」のことです。それを忍ばねばならぬということです。人間は誰でも自分のやつてゐることは苦しくつまらぬものと思ひやすく、他の人のやつてゐることはやすらかで樂しそうに見えるものであります。ここよりも彼方がよいように思えるものであります。惡風にあうた船は體（たい）も触（ふ）も同じで動搖はげしきことに變りはありません、しかし「體」に居るものは

「触」の方が安らかであらうと思ひ、「觸」の人は體の方が樂であらうと思ふのであります。居所をうつりかわつても結局同じことであるります。

世をすてて山にいる人山にても

なをうきときはいづちゆくらん（古今集）

すめばまたうき世なりけりよそながら

思ひしままの山里もかな（兼好家集）

「住所をかれれば、あたは光陰をついやして、念佛にひまもなきなり」と湛澄上人は註で示されました。

居所を移すことは環境も變ること、環境に支配され易い我々は居所を變えてみる必要のある場合もあります。孟母三遷の話が傳えられるように子供の教育にはこの環境が大切であります。そうかといつてただ居所を幾度かえようとも、この世の中のこととはどこでも心にかなりようにはできておりません、「ただ少難を心に忍ぶことが」大切だといわれるのであります。

讀書をするにも靜かな居室であれば心もおちついて結構です、時に靜かな所へ移ることも必要な場合があります、しかし靜かな處でしか讀書ができぬようであつたら今日の時代には落伍するよりほかありません、電車の中であらうと、騒音はげしき工場の中でも讀書はできる筈です。現代人は外面的、物質的の事ばかりを問題にして内面的、精神的の面も亦大切なことを見のがしてゐるのでないでしょうか。念物者は無碍の一道なりといわれます。雨降りよし、晴もよし、暑いもよし、寒いもよし、健康でもよく病氣でもよい、生きてもよい、死んでもよい、どうなつてもよいという無碍の道あり、所謂隨所に主となつて常に只今の中に生き甲斐を感じ感謝を見出しつつき通んでゆくことができる、そうした宗教的信を獲得することが一番大切ではないでしょうか。（つづく）

日本文學に現れた安樂世界

文學博士 中村 孝也

一、安樂世界へのあこがれ

表題にかかげた題で少し御話し申したいと思ひます。佛教では菩薩さまに連れていつていただく彼岸は涅槃の岸であります。その涅槃は不生不死、生きもせず死にもしない國土のことだと經文にあります。ですが、私共の居る所は生きてそして死ぬ所ですから、その生死の世界、生きてまた死ぬ世界の向うがわの岸に、不生不死の世界、生きもせず死にもしない世界があるわけになります。生死の世界は、疑いや惑いや苦しみや悩みが多くてまことに不安ですけれど、向うがわの不生不死の世界は、疑いもなく、惑いもなく、苦しみもなく、悩みもなく、明るく、朗かで、平和と幸福とに満ちておりまして、少しも不安がありません。安心して楽しく暮らせるのだそうです。そのような世界を安樂世界とも安樂國ともいいますが、それは極樂淨土と同じ所であります。安養國とも、安養界とも、安養世界とも、安養淨土とも呼ばれます。つまり生死の境の川をわたつて彼岸に到りますと、極樂淨土に上陸するのであります。その淨土に安樂世界・安養世界という別名があるというわけであらう。

これは佛教地理學の咄ですが、地球上に實際存在している國土ではありませんので、地圖はつくられておりませんし、探検隊が出かけたこともありません。しかし經文では、安樂世界の美しさを説明し、そこに行く途中の案内を書き記した文章はたくさんあります。それは科學、サイエンスではありませんが、詩と信仰の世界として私たちの魂をふくよかに包んで、いつでも喜びと潤いと安心とを與えてくれております。

わたくしは今ここで、お經文の講釋をしようとは思つていません。ここでは日本文學に現れている安樂世界について少しく申しのべようとするだけであります。

安樂世界すなわち極樂淨土のことを、日本文の形で書いたものを見わたしますと、ずいぶんたくさん目に觸れますが、手近かなものとして榮華物語の音楽の巻、玉の臺の巻をひもどきますと、御堂關白道長が造營した京都の法成寺のありさまを描寫した條のごときは壯麗華美な文章でありまして、「庭の砂は水精のやうに閃きて、池の水清く澄みて、色々の蓮の花みな生ひたり。其上に皆佛顯れ添へり。佛の御影は池に寫り映じ給へり。東西南北の御堂々々、經藏・

鐘樓まで影映りて、一佛世界と見えたり。」とか、或はまた「御堂あまたにならせ給うままだに、淨土はかくこそはと見えたり。(中略)阿彌陀如來雲に乗りておはします。觀音・勢至、蓮臺を捧げて共に乗りて來り給ふ。諸々の菩薩聖衆、音聲伎樂をして喜び迎へとり給ふ。(中略)萬目出度し。處はこれ不退なれば永く三途八難の恐を免れたり。命はまた無量なれば遂に生老病死の苦しみなし。心と事と相かなへば愛別離の苦もなし。慈眼ひとしく見れば怨憎會の苦もなし。白業の報いなければ求不得の苦もなし。金剛の身なれば五盛陰の苦なし。一度七寶莊嚴の臺に着きぬれば永く三界の苦輪の海を分れぬ」などと八苦のない安樂境の樂しさを記しております。さながら極彩色の極樂繪巻をくりひろげて見るような美しさであります。現實を超越した安樂世界に對する讚美とあこがれとの感情が豊かに溢れ満ちてゐるのであります。

源平盛衰記には小松内大臣重盛が、東西南北十二間、合せて四十八間の建物のまわりに四十八體の十二光佛をすえ、四十八箇の燈籠をともし、美しく着飾つた四十八人の美女に、念佛を唱えながらぐるぐる四十八間をまわらせ、それから更に六人づつ八組に分れて、音樂に合せて、

心の闇の深きをば

燈籠の火こそ照すなれ

彌陀の誓を憑む身は

照さぬ所はなかりけり

と、繰り返し繰り返し誦つて、また周圍をぐるぐるめぐらせ、自分には中臺に端座してこれを聽聞した話を記してあります。安樂淨土世界の姿相を、そのまま地上に實現しようとするあこがれの情が、ここにもまた溢れ満ちてゐるのであります。

梁塵秘抄の法文歌のなかには、

瑠璃の淨土はいさぎよし 月の光はさやかにて
像法轉ずる末の世に 普く照らせば底もなし
という歌がありますし、

極樂淨土のめでたさは 一つも虚なることぞなき
吹く風立つ浪鳥もみな 妙なる法をぞ唱ふなる
という歌がありますし、また

極樂淨土の宮殿は 瑠璃の瓦を青く葺き
眞珠の垂木を造り並め 瑪瑙の扉を押し開き

という歌もあります。これらの今様歌も、それぞれ安樂世界に對するあこがれの情をうたつてゐるのであります。

あこがれてゐる世界にはゆきたくありません。不安な此の岸から、安樂な彼岸、彼の岸に轉生、生れ代るにはどうすべきでありましようか。これに對する日本文學の解答について、次に申し述べることにいたします。

二、安樂世界への轉生

以上は安樂世界に對するあこがれを描寫した文學について申し述べましたが、次にはこれに伴つておこるところの淨土轉生の文學、すなわち安樂世界に生れ代る信仰を記した作品について二三申し上げることにいたします。

安樂世界にあこがれて、そこにゆきたいと思ふ人々には道しるべが入用であります。その道しるべになる燈明臺を高々と掲げてくれているのは阿彌陀如來であります。その燈明臺の光をいち早く發見して、まだ闇黒のなかをまごまごしてゐるところの多くの人々に對して、進んで案内人の役を買つて出たのは、いわゆる名僧智識と呼

ばれるところの勝れた坊さんたちでありました。

平安朝の中ごろ、民衆のなかに立ち交つて、町の門に

一たびも南無阿彌陀佛といふ人の蓮の上にのぼらぬはなし

と書きつけまして、「さればじや、皆の衆、一心に阿彌陀様におすがりめされ」と説いた空也上人は、すぐれた案内者たちのバイオニヤ、先驅者の一人であります。

仙慶法師は

極樂ははるけき程と聞きしかとつとめて至る所なりけり

と詠しまして、往きたいと願へば誰でも皆、安樂世界に往生ができると申しました。梁塵秘抄の今様歌には、

阿彌陀佛の誓願ぞ

かへすがへすも頼もしき

一たび御名を唱ふれば

佛に成るとぞ説きたまふ

とありますし、唯心房寂然も

心をすまして一たびも

なもあみだ佛といふ人は

蓮のうてなに宿りてぞ

必ず佛の身ともなる

と詠じました。元興寺の頼光という老僧が、さつぱり學問をしないにもかかわらず、念佛の功德だけで極樂に往生した話が今昔物語にあります。それは法然上人が、一枚起請文において學問知識よりも信仰に重點をおいて、「一文不知の愚鈍の身になして、」そして、「智者のふるまひをせずして、ただ一向に念佛すべし」と教えられたのと、その歩いてゆく方向が一致しております。

このようにして安樂世界に旅行する道案内人をつとめてくれた名僧たちの書いた文章のうちには、思想が純眞であるばかりでなく、辭句が洗煉されておりました。朗々として聲をあげて吟誦するに足るべき名文が少なくありません。それは佛教文學であり、法談文學

であり、日本文學の花園のなかで、とりわけ明るい光明を放ち、馥郁たる芳香をただよわせている特別地域をつくつております。「末代の衆生を往生極樂の機にあてて見るに、行少なしと疑ふべからず。一念十念に足りぬべし。罪人なりとても疑ふべからず。罪根深きを嫌はじと宣へり」と書き出してある法然上人の一紙小消息や、「夫れ流浪三界のうち、いづれのさかひに赴きてか、釋尊の出世にあはざりし。輪迴四生のあひだに、いづれの生を受けてか如來の説法をきかざりし。華嚴開講のむしろにも交はらず。般若演説の座にもつらならず、鷲峰説法の際にも臨まず、鶴林涅槃のみぎりにも到らず我れ舍衛の三億の家にや宿りけむ。知らず地獄八熱の底にや住みけむ。恥づべし、恥づべし、悲しむべし、悲しむべし」と書き出してゐる同じく法然上人の堂々たる登山狀の大文章や、「彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛まおさんと思ひたつ心の起るとき、即ち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり」といふ歎異鈔など、どれもこれも傑出した名文であります。とりわけ蓮如上人のものといわれる白骨の御文、「夫れ人生の浮生なる相をつらつら觀するに、おほよそ果敢なきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。されば未だ萬歳の人身をうけたりといふ事をきかず、一生過ぎ易し。今に至りて誰か百年の形體を保つべきや。我れや先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らず、遅れ先だつ人は、本の榮、末の露よりも繁しといへり。されば朝には紅顏ありて、夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風來りぬれば、すなはち二つのまなこたちまちにとち、一つのいきながくたえぬれば、紅顏むなしく變じて桃季のよそほひをいぬるときは、六親眷屬あつまりて、歎き悲しめども、更にその甲斐ある

べからず」との一文のごときは、一言一言、人の肺腑を穿つて、涌いて出る涙を拭いながら、深く深く人生の真相を考えこませる強い力量を有しております。

わたくしはこの種の信仰文學の價值を、今あるよりもつと高く認めて、日本文學のうちの異彩たらしめたいと常に念じております。

弱い人間は、強い信仰に勵まされるときに、自ら慰め、自ら鞭つて、勇氣と希望とを持つようになります。愛慾の浪の間に浮いたり沈んだりして年月を過した和泉式部は、涙の眼をあげて天の一角を仰ぎながら歌いました。

闇きより闇き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月
これはじつに清められた魂の切々として咽び泣く聲にほかなりませぬ。

佛は常にいませども
現ならぬぞあはれなる
人の音せぬ曉に
ほのかに夢に見えたまふ

といつて夢に見る佛にあこがれ、

氷を敲きて水搦び
霜を拂ひて薪採り
千歳の春を過ぐしてぞ
一乗妙法聞きそめし

といつて修行をつんで貴い教をきき、

佛も昔は人なりき
我らも終には佛なり
三身佛性具せる身を
知らざりけるこそ哀れなれ

といつて自分のうちに潜んでいる佛性をみとめて悦び

曉靜かに寢覺して
思へば涙ぞ抑へあへぬ

はかなく此の世を過しても いつかは淨土へ參るべき
といつて、淨土に往生することのできる希望に胸をはづませ、

我らが心に隙もなく
彌陀の淨土を願ふかな

輪廻の罪こそ重くとも
最期に必ず迎へ給へ

といつて、掌を合わせて阿彌陀如來がお迎へに來て下さることを願つてゐるのは、みどり兒が母の乳房にすがるような敬虔にして謙遜なる心がまへであります。

平家物語を見ますと、元暦元年二月、一の谷の戰で、夫である越前三位通盛卿を失つた若く美しい小宰相局が、八島へわたる十四日の夜ふけに、身を投げて夫のあとを追うた文章があります。「漫々たる海上なれば、いつちを西とは知らねども、目の入るさの山の端を、そなたの空とや覺しけむ、靜かに念佛したまへば、沖の白洲に鳴く千鳥、天のとわたる樹の音、折から哀れやまさりけむ、忍び音に、念佛百遍ばかり唱へさせたまひつつ、南無西方極樂世界の教主彌陀如來、本願あやまたず、飽かず別れし妹背のなからひ、必ず一つ運にと、泣く泣く遙かにかきくどき、南無と唱ふる聲と共に、海にぞ沈みたまひける。」小宰相は疑ふこともなく、迷ふこともなく、苦しむこともなく、惱むこともなく、悦び楽しんで心安らかに死んでいつたのでありました。それは安樂世界に生れ代つて、夫と一つ運に生きることの確信によるのであります。この文章もまた信仰文學のうちの一つの傑作であります。(つづく)

安樂世界よりのお迎え

九品佛の來迎會

——おめんかぶり——

大井線の其の名も九品佛なる驛にて下車を
すると、亭々たる樹林に圍まれて九品佛淨眞
寺が望まれる。表參道の兩側、巨松櫻樹を通
り過ぎると都座を超えた淨域に入る。境内三
万六千坪、往古源賴康の城跡たりし。

延寶六年、珂碩上人の開基にして、此地に
入る以前に彫像されおきし九品佛及び釋迦佛
を遷し奉つて九品佛淨眞寺と稱す——といふ

この寺では四年置きに八月十六日から十八
日まで三日間、獨得の「おめんかぶり」とい
う行事が行われております。正しくは來迎會
というのですが、近隣おめんかぶりで有名で
す。

當本堂は十六平方間三十六本の太柱を有す
るものに、丈六の釋迦牟尼佛を安置してあ
り、之に對して、下品堂、中品堂及び上品堂

世となるわけです。

おめんかぶりの行われる時は、三佛堂と本
堂との間に、渡り廊下が架設され、この上を
ば、淨土二十五菩薩の金色に輝く面を彼つた
信者が、二十五菩薩となつて、彼岸の三佛堂
から此岸の本堂へ、佛の來迎をなぞらえて渡
り、又、彼岸へ救ひとる態にて渡り皈つてい
く嚴やかな行道が、この法要の中心となつて
行われております。

これは當寺開山珂碩上人が、何とかして、
佛の攝取と臨終御來迎を願したいとの熱意に
よる方便の一つとして創設されたもので、爾
來中絶することなく四年目毎に営まれ、無數
の信者の尊信を獲て今日の盛大を極めており
ます。

二十五菩薩の面を彼るので、お面かぶりと
稱せられるもので、平常は、本堂に納められ

の三つの堂宇即ち三佛
堂が一行に本堂と相向
つて建てられ、各々、
彌陀三體つゝを安置し
てされております。三

佛堂は彌陀淨土の世界
であり、本堂は人間佛
釋迦の居ます此岸、此

てあります。之をすつぷり彼つて、炎天下を
行道する事は大変つらい事ではありますが、
御佛の光明攝取と臨終正念來迎にあやかりた
いため、有縁の信者が、進んでおめんをかぶ
つて行道に加わり現在に到つております。

この來迎會は、彌陀四十八願の中の第十九
の願「設し我れ佛を得たらんに十方の衆生善
提心を發して諸の功德を修し至心に發願して
我國に生ぜんと欲せんに壽終の時に臨みて假
令大衆と共に圍繞せられて其人の前に現ぜず
んば正覺を取らじ」とあるのを根本としてお
る由であります。念佛をする程の人が、た
ゞ經相の上だけでなく、少しでもこの目にふ
れ、この耳にふれて淨土よりの御使を頂く氣
持になつてみたいという心は、必ずや、命終
の來迎のみでなく、日々刻々に彌陀に攝取
られつゝある事を感應せしめずにはおか
ないものがあります。

此寺には此外長さ十米、幅三米の二世上人
筆の大名號軸、一名芝枯の名號もあり、毎夏
虫干に拜觀せしめられております外、血染め
の經衣、開山像の出開帳等いわれ多いものが
存しております。

(此記事の寫眞は表紙の③にあります。)

非安樂世界へのお迎え

千葉縣虫生の

鬼

來

迎

地獄の芝居

銚子行の汽車に乗り横芝で降りて、半道ほど行くと、山蔭の寂しい寺がある。慈土山地藏院廣濟寺というくちかけた山門を入ると正面に本堂があり、左に庫裡。この本堂の前に三間に六間位の張出しの舞臺を設け、客殿から花道を架け、毎年舊盆の施餓鬼會の折、檀

わづかに残つて劇そのものは全く廢絶してしまつてゐる。この種の芝居なり、芝居がかつた行列や歌舞は、極樂の莊嚴を現わす奈良の當麻寺、長野の十念寺等の廿五菩薩來迎の佛事と相對するもので、その起源や全盛の年代は、よほど古く溯ることが出来ると思われ、極樂の系統の佛事が、現在も各地に行われているのに比べて、地獄の系統のものは全國の郷土藝能の中でも稀有のものであり、えん魔大王や三途の川の鬼婆、鬼の振などに、勿論伎樂そのものでは無いが、伎樂の振の名残が彷彿とせしめられる。地獄、極樂の系統のものは共に起源當時の意味は別として、中ごろよりは勸善懲惡の意味を寓して、佛教の普及に役立てたもので、米山翁沾源の有朝俗諺志によると、この虫生の鬼舞は檀家の者も娛樂のためにではなく信仰のために出演し、重病長わづら

いの者が進んで亡者の役にふんして鬼に責められ、病氣本復を祈る習慣であるという。

虫生の鬼舞の由來には次のような話がある。

後白河院の頃紀伊高野山に石屋という僧があり、佛道修業の途次この村に旅して一夜の宿を乞うたが、村の掟として他國者は泊ることは許されないので止むなく一辻眞夜中ともなると堂内が俄かに陰隠となり、ふと庭上をみると獄卒らしい赤黒の鬼が現れて妙齊々々と呼んでいる。聲に應じて娘が出二鬼は鐵杖を振つてあらんかぎりの責めせつかん。石屋はこの有様に驚愕し明くるを待つて村人に話すと、領主椎名安藝守の一人娘であらうとのこと、石屋は更に安藝守に會い、昨夜の模様を具さに話すと、安藝守は「實は一人娘妙齊を失い今日はその初七日であ

る」といい、自分が領主として良民を苦しめたため、因果應報が娘の身にかかったかと、直ちに一寺を建立し、廣濟寺と稱し、石屋を請じて善提を弔つてもらつたという。

今日、虫生に残つてゐる劇の内容は、元より昔からのもの全部ではなく、僅かに大序、賽の河原、釜入、死出の山等の地獄の責苦を現わす部分と、前述の廣濟寺鬼堂の縁起を脚色した和尚道行、墓參和尚物語の部分と二つより成つてゐるが、後者は寺の縁起でもあり村の人が假面をつけずの素面で、殿様や奥方や奴にふんし、まげをつけ紅をさし、それぞれの衣裳を着るのであるから、見物には喜ばれそうであるが、古いものではないようである。

石屋和尚、椎名安藝守、奥方、妙齊信女の亡霊、下郎。舞臺裝置としては、下手に見上げるように高い死出の山を作る。その頂上に疊一疊ほどの手摺つきの櫓を作り、それに梯子を傾斜に架ける。櫓に使う柱や棒は全部椎や榊や杉の葉なぞで覆う。上手に辻堂や塔婆やえん魔大王のかける床几を置く。登場人物のうちえん魔大王、俱生神、赤鬼、黒鬼、鬼婆、観音、地藏、二人の亡者等が假面をつけ、装束は昔の物は損じて、それぞれに似せた今様のものを用いてゐる。紙面の都合で大序、賽の河原、死出の山のみを記してみよう。

【大序】まず僧侶が出て、舞臺を清めるために鹽をまき、入ると樂屋で銅拍子、銅鑼、羽目板等を叩く騒がしい囃子につれてえん魔大王が右手に太い筆、左手に笏を持ち、大股に出る。一寸歩いては留まる。その度に囃子が鳴る。トド

本舞臺上手に正面向き、床几にかける。同じくつづいて俱生神が同じしぐさで左手に笏、右に筆を持つて現われる。つづいて鬼婆、黒鬼登場する。次に亂聲で赤鬼が太い棒を持ち、亡者を先頭にして追つて出る。亡者は白帷巾をスツボリ冠り、屈んでゐるのを、大王のセリフで鬼婆が立上り、亡者のえり首をとつて俱生神の方に面を向けさせる。ここで俱生神が亡者の生前の罪を判じる仕草があつて、「大罪人や」のセリフと共に二鬼が亡者を追立てて入る。

【さいの河原】賽の河原の和讃につれて、舞臺上手寄りで七、八人の子供の亡者が小石を拾ひ集めてゐると左右から黒鬼、赤鬼が出てきて子供たちを叫び聲をあげながら蹴ちらす。子供たちは逃げ、或いは泣き叫ぶ。

花道から地藏が黒の衣、紺の脚

絆、錫杖を持つて出ると、子供たちは長い列をつくつて地藏の背後にかくれる。そこで地藏と二鬼の間答があつて、二鬼は下手に入り、背後に子供の列を従えて和讃につれて舞臺を一廻りする。

【死出の山】舞臺下手の櫓の上に黒鬼、傍に大石の作物がある。下にはえん魔大王、俱生神、鬼婆がゐる。赤い着付、白の細帯を前で結んだ女の亡者が銅拍子、銅鑼の囃子で赤鬼に追い立てられて登場する。鬼婆がその亡者を取つて押え、生前の科により死出の山に追立てる。梯子傳いに櫓によると、面鬼が大石で押えつけ、梯子の下に追いやる等のいろいろの責める科する。やがて花道から観音がさかきの枝を持つて出る。鬼と問答になり、和讃の音楽と共に幕となる。(文化財保護委員會・森晋日)

(歌舞伎發行・幕見第十一號より)

キヤリを唄つて興を添える

——眞野先生祝賀會に列して——

村 田 嘉 久 子

六月九日、眞野正順先生が文學博士の學位を授與されました、御祝ひの會が日比谷の松本樓に於て、催されましたが、この發起人の方々の、御名前を拜見致しますと、佛教界の御偉い御方ばかりで、こうしたお席へ御知らせをいただいて伺へました事は、誠に身に餘る光榮と感謝致しました。

御婦人の御出席はなく、僅かに主賓眞野先生の奥様と、其他四五人の奥様だけでしたので、始めメーソテーブルへ……と當日の幹事の方から言はれました時には少々面喰ひました。

何故なら私のやうな、どつちつかずの、つまり宗教界では、赤子にひとしい者が、お歴々のお方をさしおいて、上の方のテーブルに着くといふ事は、誠に恐れ入るので、實は御辭退もならず、おちお

ち致して居りましたが、其お蔭で、又と伺へない偉い皆様方のテーブルスピーチ、お祝ひの御言葉など近く拜聴出来ました事は、この上もない幸せでございました。

然し實を申しますと、場所が場所でございますから、それはお歴々の後で、私が、何か喋らされる……と言ふ事は無い、と信じては居りましたが、何か、やらされる……と言ふ不安で心も心ならず、と言つた氣持で、多少上つて居りました。

やがて椎尾大僧正、安藤國務大臣、清水谷大僧正、宮本博士など、皆様の御祝辭が濟みますと、最後に幹事の方から、私へ向つて、キヤリをやれ、との御言葉がありましたので、瞬間、ソレ來た、と正直の所思ひました。

私は卅七八年前、帝國で、其頃故幸四郎丈、故先代梅幸丈が珍らしく「勢獅子」を上演の際、幸四郎丈は男役ですから「勢獅子」の頭の役を度々演つていらつしやいましたが、故梅幸丈は、女形でいらつしやるので立役はめつたに演らない、其おきてを破つて、其時始めてと言つて宜い位ひの男役、頭の梅吉になつて出られるので、今迄と違つて何か變つた趣向を……と言ふ事になつて、それでは專屬女優を全部手古舞姿で出さうと言ふ事で、全部の女優さんが、この時は手古舞で舞臺で、キヤリを唄つたのでしたが、私にキヤリの音頭の大役を仰せ付かつて、誠に未熟者ながら面目をほどこしたこ

とがありました。それが評判よく、大阪へ始めて私どもが、興行に來りました時にも、此キヤリが出ましたのですが、それ以來、卅何年もやらずに居りました。

何しろむづかしいので、素人同様の私などが一ヶ月や二ヶ月で、覺へられるものでもなく、其當時、吉原で名妓といはれた、おさだ、おなつといふ姐さん方に隨分教へても頂きました、その後はお二人の姐さんが忙しいので、代理として、矢張り新橋で有名なおひろ、と言ふ姐さんが代稽古に、來られました、音頭を取るだけに、きびしい教へ方をされました。又隨分お小言も聞き、むづかしいので、嫌氣がさして來たりしました。

そうしたキヤリを、ふつと卅七八年前を思ひ出して、丁度昨年、私の印可の師たる、増上寺御法主、椎尾大僧正の喜の字の御祝ひの席で、皆様からお祝ひに何かやれと仰しやられて、久しく聲を出しませんし、半分は忘れて仕舞つたのですが、まゝよ、御喜びの心さえ通ればよいと思つて、やりました。皆様は大變に喜んで下さつて、そればかりか、椎尾先生も後で、「中々大きな聲を出すので吃驚したよ」と仰しやつて下さいました。其時の事を、どなたか覺へて居て、この御祝の席で、御指名にあづかつた譯でございませう。

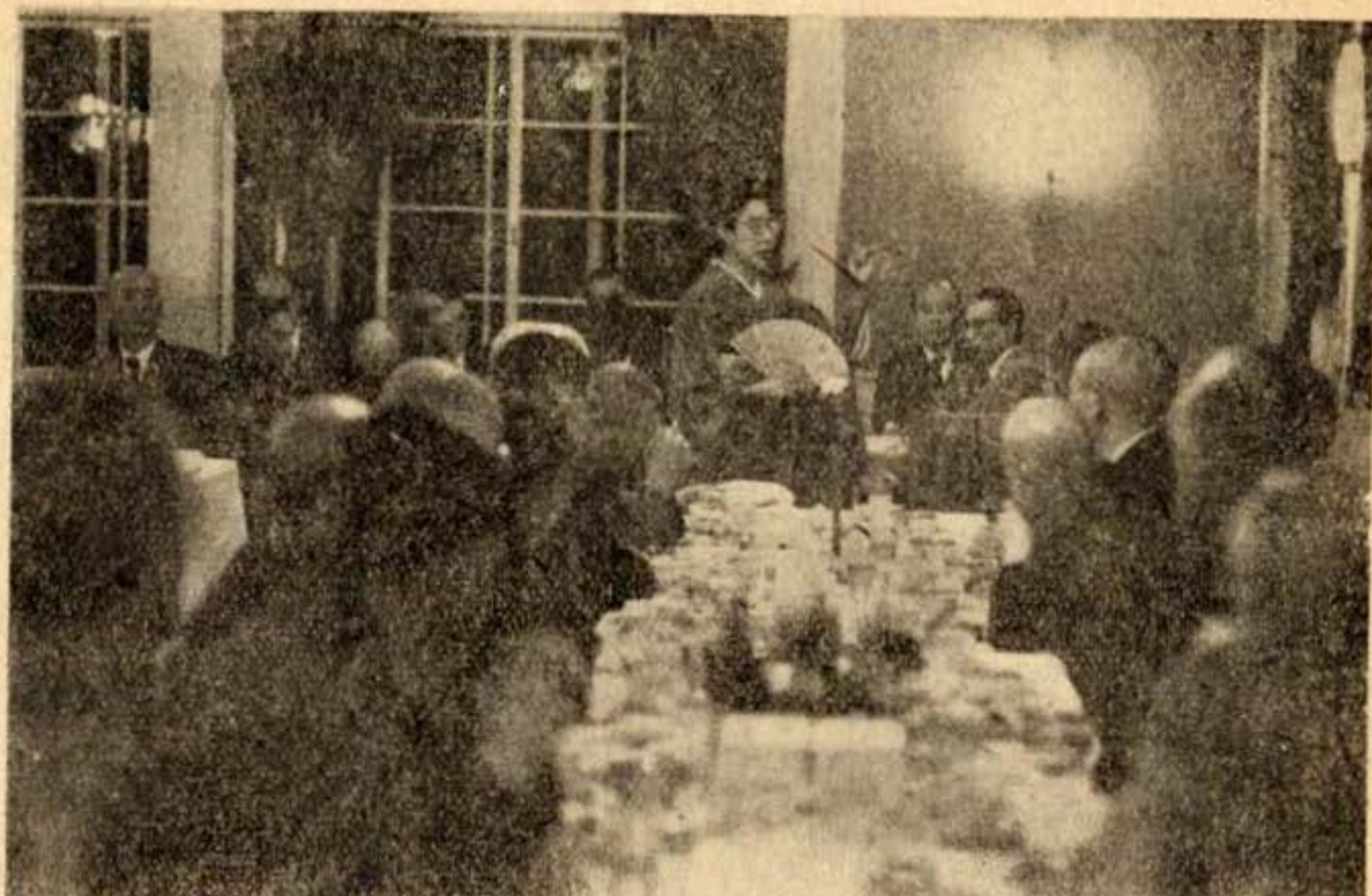
さて立上つて見ますとテーブルとテーブルの中の、僅かな空間でいたすこととてなか／＼氣分が出ません。

おかしなものでどうせ聲を張上げるだけの事だから、どつちにしたらつて同じじやないかと思ふ方があるかも知れませんが、不思議に

舞台人は、矢張り一段と高い處の方が、すべてがやりよいのです。

然しこの夜は、私は眞野先生にいつも蔭に陽に、何かと御指導をいたゞいて居りますので、この御喜びの一刻を、少しでも朗らかに賑やかに、致したい氣持で一杯でございましたから、そして又私が有髪の尼としてその半身の藝能人としての面目をも、持ちまして、どうしても、よく唄ひたいと念願して居りました爲めか、この日の何かのお知らせなのでせうか、大病後の私としては、誠に具合よく、聲の調子も無事に、す／＼と出ましたので、誠にホッと致しました。私の氣持と致しましては、眞野先生は大そうお體がお弱い、と伺ひましたので、私も小さい時からもう駄目だ／＼、と言はれ通して今日まで來りましたのも、一つは聲を出す仕事に、たゞさはつて居たから、よかつたのかも知れませんが、何度も醫師に見放されかつた私でも、出せばこんな聲も出せるのだ、といふやうな事を、知つて頂きたかつたのでございます。

丁度私のテーブルの右隣りに私の得度の師である願行寺住職佐藤賢順先生から、御紹介をうけて、始めてお目にかゝつた、千葉醫大講師の和田正系博士が居られ、前の席には大東出版社長岩野眞雄先生が、その隣りには、赤羽心光院住職戸松學瑛先生が着席されて居て、此お三人から盛んに、昔の帝劇時代のお話が出て、誠に／＼懐かしい事でもございました。殊に和田博士は、今の芝居は何やらあわたとしくて後になつてどうも觀たやうな氣が後でしない、少し位ひ高くてよいから、落着いたよい芝居をユックリした氣分で、觀たいものだ、などと、劇連の方の當然お考へなされさうな事を仰しやつ



て居られ、誠に昔を偶び楽しい宵でございまして。それにして、この盛大なる眞野先生文學博士祝賀會に、よくぞ、お知らせ頂けて、出席させて頂けてました事は、深く阿彌陀様に感謝して居ります次第でございます。

虚

禮

フランスでは人をまねく度数の多い程上流に屬するそうであるが、ある葬儀に參列して思つたことであるが、日本では禮儀不禮儀に集る人の數によつてその家の交際の廣さを示すようである。

田舎では殆んどが御馳走に集るような感があるが、都會では名刺を置いて焼香して歸へる。非常にいい傾向である。多くの人とともに喜んだり、悲しんだりすることはいいが、それが餘りにも虚禮にすぎていた。喜びも、悲しみもそつとさせてやるだけの餘裕がなくてはならぬ。虚榮と虚禮とに疲れるだけで、そこには何の味もない。

名刺だけでその意を表するのは餘裕をもたせてやる上にも効果がある。本當に喜びも悲しみも味うのであつたらそれ位の心持をもつてしかるべきである。人情のきびはここにとやかくする必要はないが、人の情程複雑なものはない。他人を思い自己を思う、自己を思うて他人を思うべし。自己を強く反省し、自己を強く虚いたげることによつて生れる。そこに自己の尊大さも威嚴も生れてくる。己れに對して強き批判をもつものこそ美しい情をもち得る。(S)

哀しい供養

——恵まれぬ人々のある佛事——

木津 義彰

長崎市 悟眞寺住職

昭和二十九年七月十一日の長崎婦人新聞は、「哀し女心に燃る愛火、兒の靈よ眠れ！」の見出しのもとに、長崎市の貸席業組合に働く遊女達が、自からの身に宿した不遇の子の靈を追善する爲に法要を行つた事を報じている。

それは、社會的に如何に惡であり、矛盾であるか分り切た事ながら、そうしたものが、嚴然と存在している事は否定出来ない。そして、宿命的にまで追い込まれた彼女等は、陽蔭者の如く哀しく泣く。これでよいのであろうか。これは、その記録の一つである。

拙寺の近くに昔からの遊廓正しくは席貸がありますが、そこに働いている遊女正しくは従業婦達のうちで健康な肉體を持つているが故に時に妊ることがあり彼女達もそのなりわいのために掻破手術を行ふわけですがやはりお胎の子としてそれを思う時やるせなくやむにやまれない母情から自發的に生命の大海に泛びては東の間に消えた泡沫の如き水兒の供養を組合長を通じてたのんで來ましたので新聞所載の様に供養の法要をつとめました。一應、現在賣春禁止法案

への關連や、世間的常識的な批判をうけることも考へて見ましたけれど宗教者としての立場から、一應世間的政治的法律的なそれを超えて彼女らの切實な懺悔の氣持が懺へる純粹な念ひが叶へられるようにと考へたのです。

又、單なるお祭りさわぎ見たいに一般に見られてもどうかたと一應考へたのですが、やはりつとめることにしました。つまり近頃は供養ばやりと云ふのでせうか先日パーマネット屋さんが髪の毛の供養をしたときいています。長崎でも魚屋さんの魚供養、カステラ屋さんのタマゴ供養等がありますしその中には宣傳も兼ねた商魂の混ぜられたものもあります。しかしまた一方こちらの醫大では例年解剖祭や實驗用の犬猫猿兎等のそれも行はれてその司式をした事もありました。東京では水兒の供養としてはこの三月、増上寺で財團法人母性保護醫協會の施主で人工妊娠中絶水兒の供養がおごそかに修せられた様ですね。

みな夫々に深淺の差はあれ、施主の宗教的心情に基いたものでありませう。しかし一般的に宗教心とか信仰といふものとは一寸かけ

はなれたと目せられる遊女達の、その一人々々のやるせない宿業意識のもだえが集團的に「この子たちの供養をして！」といふ叫びとなつたことは彼女らが、特殊な職業女性であるだけに、私の心をつよくうちました。

……遊客といふ名の男達（それは複数で、名も知れない）を父として遊女といふ名の母の胎内に宿り、人工流産を以て消え去らしめられる兒達のいのちの儚なさ。ちやうど雨に着るビニールのマントにも似た透明なヴェールにつつまれて人體以前の姿で出て来るのです——それを見た時の（なるだけかくして見せまいとするのですが）この母たちの名狀し難い哀しみの姿には、非情に、とつとめる私も佛教でおつしやる、「業」とはこんなものかと思ひ、……云はゞ下手人（？）としてのこの私の立場の罪深さを思ふのです……さう貸席組合診療所のお醫者さんが泌々云つていました。

——供養の相談をうけて私はぢきに釋尊と蓮華色女（ワサナニシメメ）のこと、宗祖法然上人と室の泊りの遊女のこと胸に浮びました。私は釋尊宗祖のこれらの女性に向はれた時の慈眼と悲心を如何にうけついで、如何に語り如何に慰めはげますか叶はない乍らも彼女らの心に燈りを點せばいゝのか、つくづくと私自身の信薄く道心弱き教化力の無さになさけなくなりました。思ひあぐねた末、唯、彼女達の哀しみと共に哀しみ、なげきと共になげいて、同じ心でその子たちの必得往生を思ひつゝひたすら念佛するだけだと思ひました。そんな心持で供養文も草しました。文章も體を成していなかつたのですが、法要に讀む折、その遊女達のしのび泣きの聲が式場に潮が満ちて来る様に流れ、私もその涕泣の聲におし流されさうになりました。

法要の差定はその供養に彼女達も參加してもらふ意味で簡短な偈

文は訓讀にし隨分意譯して用ひましたが、特に最初一分間ごく間を置いて靜かに磬を鳴らして、默思の時を靜慮させ、又廣懺悔の次に略懺悔文を一句宛追唱してもらいました。焼香は代表だけでなく彼女たち一人々々にしてもらひましたが、こう云ふ法要の場面宗教の雰囲気慣れないせいもあつて何だが、ぎこちなく見えるとしても眞剣な云はゞ異狀なまでの感動の姿には普通の儀式にないものを見たと思ひました。

最後に法話としてその感想をのべてなぐさめはげましと念佛をすめ、お十念授與し同唱しましたが涙でうるんだ眼と頬と聲にはもはや賣春婦の姿はなく、薄命の兒を憐みその往生を願ふ本當に尊い「母性」の姿が如實に顯現されてゐると思つたと云つたら皆さんは宗教的感傷だとおつしやるでせうか。

終つて別室で法衣を脱ぎお茶を頂いてゐると、式場から店である彼女たちの職場に歸つてゆくのが窓から見えました。手に手に小さな紙包みを大事さうに持つてゐます。それは祭壇に供へられたお饅頭供物のおさがりを貰つて歸るのです。その表情には心なしか悦びと安らひの色が浮んでゐました。

私は窓から彼女達の歸つてゆく姿を眺めつゝ思ひました——彼女たちはそれ／＼の持ち部屋に坐つて、その包みを開いてお饅頭を手にとるだらう。そしてどんな氣持でその味を噛みしめるのか。お饅頭の甘さ——子の呼ぶ聲をきかず母の應ゆる聲もかけず母子の縁も結ぶと見ゆる間もなく忽ちにして切れ逝かしめし子たち、の上に思を漂はせるであらうか。思念の中に漂ふおもひ。そして現實はかくも厳しくつめたいものか。

漂ふ思ひと云へば、私は童謡のシャボン玉のうたを何となく思

ひ出す。シャボン王とんだ、……シャボン玉消えた生れてすぐに飛ばずに消えた風、かぜ吹くなシャボン玉飛ばそ……。屋根までとんでこわれるならまだいゝかも知れない。生れてすぐにこわれでも生まれたことは生まれたのだ。だが彼女らには生まれる途中で消え去つたシャボン玉なのだ。あゝ憂世の風は胎内まで吹いてゐるのか。

人の世の矛盾。娑婆とは忍苦の世界。そして彼女たちには「掻破」といふ不殺生戒を犯さねば生きて行けない世界といふこと、それは貧しきが故に花街に夜毎の客に身をひさがねば生きられないといふこと、——これは遠い昔からこれらの女性達のいたましい業であつた。日本全國、いや全世界のおびただしいこの種の女性達の救ひは何故にあるのであらうか。

賣春禁止法——の禁斷の制札また人の心に立てられなければならない。正しい性道德の確立は？不邪淫戒はここでどう説かれどう行ぜられたらいいのか？

彼女らの肉體は汚れ切つてゐる——人々はさう云う。だがはげしくも心をいたましめるこの涙とこの涕泣がその心と體とを洗ひ上げて蓮華清淨のはなをその女身の胸に咲かしめないであらうか？

だが又、法要が終れば明日でなく今夜から彼女らは遊客の袖を引いて肉の取引に従事せねばならないのか、彼女らの名は「席貸業従事婦。」

都大路に棄てられし塵、芥の推の中にも、げに香たかく、こころ愉しき白蓮は生ぜん。

この法句經の一偈こそ彼女らに與へて、けふの彼女らの悲願をほ

め發奮、心をはげまし夜毎の務めをなくさめてやらうとすれば皮肉になるだらうか。

とつ、おいつ、思へば思ふ程一沙門の思念に余り、一凡僧の手に負へないことである。だが煩惱と——全人間の煩惱と對決する佛教者はその名に於ても手を拱ねては居れない。——私は鞭うたれる様な思ひで、所謂お坊さんの仕事のし甲斐とその難しさ、淨土の遙るかさを思ひました。

そして、しみじみと宗祖上人が遊女に與へられたことばを味つて心にしみ入る思ひがしました。

「……げにもさようにて世をわたり給らん罪障まことにかろからざれば、酬報またはかりがたし、もしかゝらずして世をわたり給ぬべきはかりごとあらば、すみやかに、そのわざをすて給ふべし。もし餘のはかりごともなく、又身命をかへりみざるほどの道心いまだおこりたまはずば、たゞそのまゝにて、もはら念佛すべし。彌陀如來は、さやうなる罪人のためにこそ、弘誓をたてたまへる事にて侍れ。たゞふかく本願をたのみて、あへて卑下する事なかれ、本願を憑て念佛せば往生うたがひあるまじ……」

味はひ深く、ほとりと胸の扉を叩くおことばです。

——たゞふかく本願をたのみてあへて卑下することなかれ——人間性を全人格的に把握されたすばらしさ。佛性とはまた人間性の尊厳でもあるに私は思ひつゞけました。

やがて式場である席貸組合の事務所を辭して巷に出ると、夕靄に紅燈青燈の遊廓のネオンが息づく様に點いてゐました。

衆愚

應賢谷澁

キ稼業も生じ、正信と邪教とが肩をならべて出てくる。

人の性を、「賢」なりと考えるものに聖徳太子の憲法十七條がある。「人尤だ愚しきは鮮し、能く教うるをもて従いぬ」の考である。勝鬘經義疏の中の如來藏章の一節を太子は次のように釋せられている。「此の如來藏は己に惑果を超えて獨り自ら清淨なり」、如來藏の中につゝまれるわれ／＼「衆生」は、惑も、惑の結果としての業も、ともに越え得た彼岸に於て、そのものゝ姿はそのままに清淨なものである。

「大衆」を考える際、このことは正道を踏むものと愚はれる。このことなくしては、何をばりあいにして佛教を説かんや、である。

「自性清淨」はもと大乘佛教の基本である。

もし「大衆」にこれだけの信念と期待とをかけ「人權尊重」を行つてゆくとするならば、

人權尊重など通りこして、拜み合う生活になるはずである。少くともそれに近づくはずである。

そうすれば、民主政治はたちどころに實現され、「大衆」を愚罵するようなインチ

キ稼業や、狂信的な「何々様」もあとを斷つ

「衆愚」と言うことばがある。大勢集つた

人々の間に動く輕はづみな心、そう言うもの

をとらえて「大衆」「衆生」を馬鹿にしたこ

とばなのである。ほんとうに「大衆」は「愚」

なものであるか。一體、宗教も、政治

も、經濟も、「大衆」あつてのものだねであ

る。それ故に、「大衆」をどう考えるかにつ

いて、もう少し眞剣な態度があつてよいと思

われる。この判斷の立場々々によつて、獨裁

政治も民主政治も生れ、正しい生業もインチ

はづである。が、どつこい現實はそうではない。

「大衆」というものに對して、中々味のあつた判断を下し、よくその心理をキャッチし、アツピールしたものにヒットラアの「我が闘争」がある。彼は言う

「もしもドイツ人運動の指指者たちが、大衆の重要性が理解できるだけ知的であつたとしたらどうだろう——」。

もしも、大衆の無知を認識するならば、純粹に心理的な理由から、大衆には二種の敵を與えず、ただ一種の敵のみが押しつけられなければならない。そして萬人の憎惡がこの一つだけの敵に集中されていなければならない。多方面に擴つた敵すらも、たゞ一種のカテゴリーだけに歸するように見せかけることは、眞の指指者の才能の一部分である。」

何とまたすばらしい卓見であらう。何と又胸のすくようなダンカであらう。何とまた大衆を馬鹿にした宣言であらう。

「大衆の重要性」を認めていたゞくのは至極けつこうであるが、「大衆の無知なるを認

め」られるに至つて、獨裁者の根性まる出しである。

彼は宗教に關しても次の如く考へている。

「ドイツ人側の教會が防衛力に於て手薄であつたのは、牧師が本心からの敵意を持つていたのでも、彼等が上層部からの命令を受けたためでもなく、たゞ、ドイツ人の物を事を主觀的よりもむしろ客觀的にのみ見ると言ふ不幸な習慣に屈從した結果に外ならない。

ドイツ民衆の權利や運命を考へるより先に牧師は純然たる教理上の意見、例へば「政府の權利」「民主々義」「平和主義」「國際的結束」という如き無意味なことに心をうばわれた」

今われ／＼が盛んに口にしてゐる「民主々義」「平和主義」「國際的結束」に對しても無意味なことなりときめつけ、「牧師の教理上の意見」を「先入觀念」なりとし、「客觀的にものを見る」ことを「不幸な習慣」としてなげいてゐる。

「我々は、ドイツ民衆を、——絶對的に例外なく——少年時代から彼等自身の國民として

の權利を認識させるために訓練しなければならぬ」

しかしこのことは、決して遠い昔のことでもなく、われ／＼に無關係なことでもないのだ、このことに力を得、このドグマを信奉し、この「とざされた心」を心とした國民が、ドイツと共に生きんとした日本そのものゝ眞の姿であり、いや、「われ／＼自身」であつたのだ。のみならず、戦後の現在に於てもこの事は、又くりかえされかねない狀勢にあるのだ。恐るべきことはこのことにある。

勝鬘經の自性清淨章には次の如く説かれる。

「世尊、如來藏は是れ法界藏なり、法身藏なり、出世間上上藏なり、自性清淨藏なり。此の自性清淨と如來藏とは、客塵煩惱と上煩惱とに染せらるゝ不思議の如來の境界なり。」

とある。よしなにものかに浸されることがあつても、それは一時的な皮相の迷いであつて、根本基底は、いつ、いかなる時と所とを問はず。自性清淨であると説かれてゐる。そして、「客塵」としての煩惱に、たやすく染められるような、そう言うものであると言われているのである。

太子は釋せられて、

「言はれるこゝろは、この如來藏はこの煩惱のために染せられ、又は染せられずと言ひ、それは定め難し、何となれば、既に是れ自性清淨なり、何ぞ染と言ふを得ん。」

と言われている。如來藏と言ふのは、煩惱によつて浸されがたいと言ふようなことは決定出来ない。なぜならば、はじめから清淨なるものなのである。清淨の光の前には、染も不染もその影をけすものなのである。と説かれてゐる。人間大衆の虚妄、邪惡は、本來が虚無の姿である。このことを是正してゆくならば、必ずや自性清淨なるものを實現し得ると言ふ一大確信であるのだ。

「人尤だ惡しきもの鮮し、能く教ふるをもて従いぬ。」

と言はれるわかりやすいお言葉の中に盛られてゐる太子の深い心底と確信は、くめどもつきぬ大慈悲の宣言と恩はれるのである。

「大衆」は「愚」なる一面をもつ、それは勝鬘經の如來藏觀成立以來の出來ごとである。

ヒットラアは言ふ

「嘘もその程度が大きくなれば、ある程度の信用を得る。大衆の心情は、原始的に單純であるから、小さな嘘よりもむしろ大規

模な嘘によつて簡單にごまかされる。小さな嘘をつくことには彼等自身も慣れてゐるからその嘘がすぐ判る。しかし大規模な嘘の可能性などは夢にも考えたことがないから、本當に大仕掛な歪曲を發見することは出来ないのが常である。」

ずいぶん思ひきつた意見である。しかしこれは、笑えない、馬鹿に出来ない一面をもつ。それ程「大衆」は「客塵」の煩惱にそまりやすいのである。あの理知的な、批判的なドイツ國民でさえ、ヒットラアをしてこのことを言わしめてゐるのである。まして現今の日本に於ては、尙のことこのことばが耳をうつ。

平和憲法は戦争放棄をうたいあげた。その憲法の改められないうちにそれを奉ずる國民の中に軍隊が現れた。いや軍隊ならざる何ものが現れた。學校の教師は戦争のいかに人道に反するものかを生徒に納得させようとす。その校門を特車がキアタピラの音をきしませる。

黨はその人の信條によつて成立し、政策はその信條の具現であると教師が教壇で叫ぶ。生徒が家へ歸つて新聞を開けば「黨の離合はお手のもの」と言はんばかりの政治家の寫眞が現れる。

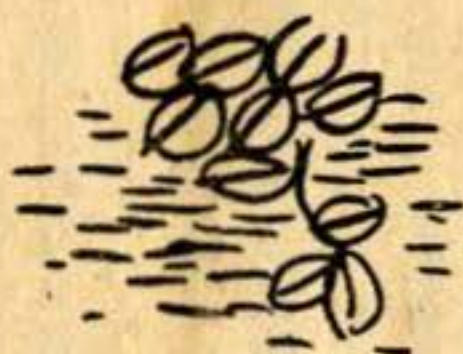
何々事件は公判を終つた。そのことの眞實をどの點に見るかについては大衆は知らない。しかしながら、事件の落命を上まわる死刑の判決に對しても、大衆は口を開かない。このようなことを挙げればきりが無い。「大衆」はついに「愚」なりとの判斷を下し度くなる。

しかしながらそのように思うことはやはり間違つてゐるのである。「大衆」は決して何もわからない「衆愚」ではあり得ない。もしそうであつたならば、ヒットラーもあんな最後はとげなかつたはずだ。「大衆」の理性はそんなに早くは動かない。けれども「大衆」を「衆愚」とみなしたものに對して、必ず酬いるだけの底力をもつてゐる。「大衆」を「衆愚」と考える考え方が強ければ強い程、その酬いもまた大きいのである。

現今政治家、惡質資本家、姪社邪教がいかなる將來をたどるか、それは「大衆」の良識が決定する。いや現に決定しつつあるのである。

「自性清淨心はこれ煩惱の爲に染汚せらるゝも、而も究竟することを得ん。」これは勝鬘經の結びであると同時に我々の確信でありまた悲願でもあるのだ。

火物語



竹中・信常

するようなのは、夏には不向き。廣い田圃を渡る涼風の中で、はるかかなたの森陰に、チラチラとまたたく人家の灯火こそ、一點の涼味として、心の隅々にまで、浸み入つて来る。火は全く、人間にとつて生活上缺くことは出来ない。そして、それは只、單に日常の生活の上に丈けではなく、精神生活にとつても忘れることの出来ないものである。

そこで、さしづめ直ぐ考えつくのは、お盆に焚く迎え火、送り火。佛前に捧げる燈明。役僧が法要のたびに、いつも心配するお焼香の火、等々。火をつける、物を燃すということが、宗教の色々な行事の中に仲々多いことは今更いうまでもない。然し、その色々な行事の中でも、最も純粹というか、宗教的な目的で行われるものは、「供養」のために行わ

都會ではお盆が済んで、やれやれという今日此頃、農村では月おくれのお盆に、何やかや忙しい明け暮れが続く。涼風の縁側に蚊やりを焚いて、岐阜灯籠の火の下で夕涼みするのも、夏の風物としては缺くことが出来ない。

「火」を語るには、適しい一夕である。ところで、火といつても、その使い方に二通りある。物を煮たり焼いたり、體を暖めたりするのと、今日でこそ電氣に代つてしまつたが、灯火として明りをとるのとである。はさみと何とやはらはいふやうで切れるというが、火もまた、使いやうで、熱くもあれば、涼しくもある。冬の炬燵を連想

れるものといえる。佛教では供養ということをよくいうが、これは仲々むづかしいことで坊さんにお布施を上げるのも供養。法事にお客を招いて御馳走するのも供養。更にそんな物やお金なしに、御經を讀んだり、冥福を祈るのも供養といわれる。それ故一概に供養といつても、ここでは火を燃したり、物を焼いたりすることに限つて見ると、それは更に遡つて、「燔祭」ということになる。インド古來の神アグニ（アグニとは火の意）は帝釋天（風天）及び日天と共にヴェーダの三尊といわれ、神と人間の仲立ちをする者として、人家を保護し、人の行業を監守する神と信ぜられ、丁度ギリシャ及び

日本のカマドの火の崇拜と似ているといわれる。更には、眞言宗や天台宗で今も行つてゐる護摩の起源についても「火焰昇騰して天に至る」という信仰から、これを神と人間の仲介者とし、神に供養するには、必らずこれを招く。又、此思想より、火中に物を投じて、以つて、諸神を供養するに至る。これ護摩なり」といわれている。ところで燔祭というのは、「神様というものは空氣のような、煙りのようなものだから、食物をそのままお供えしてもたべられない。食物を焼いて、煙りにすれば神様はそれを召上げれる」といふところから、お供えした食物（主に動物の肉）を焼くことなのである。してみれば、焼くということ、そして煙りにするということは、神様に物を差上げる最もよい方法ということが出来る。そして此方法が段々に純粹化されると、佛教でいう燃燈（あかりをつける）とか焼香といふた行事に變つて来る。この移り變りをよく示すものとして、前述した護摩を擧げることが出来る。

護摩はインドの古代から盛んに行われて來たもので、本來はヴェーダ時代の最高神アグニに供養するために行われた祭式で、供物を祭壇の爐中に投げ入れると、焰がのぼり、天にいる諸神の口にまで達し、一方これを口にした諸神は力を得て、諸魔を降伏し、人類に幸福を與えるという信仰から行われたのである。これが佛教に取り入れられると、大日經疏に説かれているように、内護摩と外護摩とに分れるようになった。内護摩というのは、心の智火を以つて、一切無明の株杭を焼きつくすことをいい、外護摩とは、檀を設け、法に準じて色々の物を火中に投げ入れて、諸佛に供養することをいふのである。

ところが、燔祭が護摩に變るのとは別に、矢張り燔祭から變つた

ものに「捨身」ということがある。捨身というのと私共は、支那の昔、白蓮社という宗派で行われた捨身往生のことを思い出すが、それとはちがつて、法華經第六葉五菩薩本事品に「われ神力を以つて、佛を供養すといえども、身を以つて供養するにしかずと。即ち諸香……を服し諸香油をのみ、香油を身に塗り……其の身火燃ゆること千二百才、是れを過ぎ已りて後、その身すなわちつく。……大精進を勤行し、所愛の身を捨てて世尊を供養するは無上の慧を求んがためなり」とある。體に油をぬつて火をつけて、千二百年も燃えつゞけて佛の供養にするという、全く以つて物すごい御供養法である。大智度論の第十一卷には、布施を内布施と外布施とに分けて、内布施に「不惜身命・普施衆生」と説いており、第十二卷では上中下の布施とし、捨身を上布施としている。

お香を焚くことに始まつて、自分の體を燃すに至るまで、火に投じて物を燃すということは、佛教でも弘く行われているのである。

今日でこそ電氣が普及しておるが、それでも時には、チラチラとまたたく火が欲しい。殊に、本堂の内陣深く、しつとりとした光茫を放つた燈明は、何といつても電燈ではない味を持つてゐる。

燈明は、松明・燈灯・行燈などのように、たゞの照明具とは異つて、宗教的意味が強い。それは、永くともしつゞけるといふところに常夜燈とか不斷燈のようなものも生れて來るのである。比叡山の根本中堂の火は有名だが、そのほか羽前の湯殿山の常火堂は開基能除太子が大日如來より授つた淨化を萬世に傳え、陸中東磐井郡八澤村の岩山さんという家で寶曆二年以來の火種が残こされており、戦前丸岡では藩主が九州から國替えになつた元禄元年の頃から、明治

維新までの百八十年間、何軒かの家で火を絶やさずに保ちつゞけて来たといわれている。佛教では、常燈明、長明燈、常夜燈などと呼ばれて、古くから重んぜられており、目連問戒律五百輕重事經卷上、問佛事佛に「佛の光明を續くるに晝は減すべきや否や。……若し減せば墮を犯す。佛に明暗なしと雖も。施者福を得るが故なり。減せば罪あり」四分律行事鈔資持記卷下の四に「次に供佛燈を明す。今の所謂長明燈也、若し佛に明暗あらば、則ち當に夜は點じ、晝は減すべし。明暗なきを以ての故に晝夜を問わず」とあり、佛陀の智慧の晝も夜も、永く變りなき如く、燈火もまた點じつゞけることをすすめている。

燈火を燃しつゞけるということは、生命・理念・系統が絶えまなくつゞくことをあらわすものといふことが出来る。そしてこのような常燈が儀禮化された形として燈籠がある。萬燈會などは、燈明の功德を數を増すことによつてたたえる行事ともいふことが出来る。ことにお盆の季節には、魂送り、精靈送りのための流燈會が行われ松島の瑞嚴寺はこれで名高い。

燃える火をじつと見つめてみると、その焰は實に美しい。風もなく、しつとりとして空氣の中で燃えつゞける灯火は、牙え切つた智慧の塊りのように輝いている。とまた別に、揺れ動くその姿は、一瞬のゆるみなく、なめらかに伸び縮みして、黄金色の纖細な心の働きを思わせる。

このように、火は、そして焰は智慧、眞實の智慧を現わすものとされる。火が神の顯現であるとは、よく言われるところだが、それが一段と純化されて、佛教に多くみられるように、それは佛の智慧

をあらわす。佛智としては、まづ、釋迦如來の五智の徳用と、三部の衆徳とを現わす八佛項の中の一つとして、「光聚佛項」というのがある。これはまた、火光佛項、放光佛項、光聚佛項輪王とも呼ばれ、光明を以つて衆生を聚集する尊王である。また、佛の三十二相の一つ、而も最勝第一とされるものに佛・菩薩の眉間に生ずる白毛の相があり、法華經第一、序品によると、「東方万八千の世界を照して周遍せざることなし」といわれている。これらの佛の發する光明とは一體どんなものかというのに、光明即ち光即明の意味で、佛菩薩の身體から發する光焰のことである。佛の光明には、常光または月光といつて常に光り輝いて、永く減せざる光と、神通光または現起光、放光といつて、光益即ち時に應じてその神通を現わすに際して、放つ光とがある。光益のことについては、大智度論第七に、「光明神力に下中上あり、呪術、幻術の能く光明變化をなすは下なり。諸天龍神の光明神力を報得するは中なり。諸々の三昧に入り、今世の功德心力を以つて、大光明を放ち、大神力を現するは上なり」といつて、三昧の中で放つ光明、即ち燈明の心境を最上としている。また、このような光りが身體の何處から出るかといふことについては、全身から發光する舉身光、三十二相の中のいづれか一相から發するのを一相光、眉間の白毫相から出る光を白毫光・毫光・眉間光などといい、毛孔相からのを毛孔相、頂邊相からのを頭光、後背からのを後光という。

以上のような、佛の身光は單に光り輝くだけではなく、色々に變化して、佛の意志を衆生に傳へ、衆生の上に様々の功德を與えるものとされる。無量壽經卷上には、「衆生ありてこの光に遇う者は、三垢消滅し、身意柔軟なり。歡喜踊躍して善心生ず。若し三塗勤苦

の處に在りて、此光明を見れば、皆休息を得てまた苦惱なく、壽終の後、みな解脫を蒙る」と説いている。佛の光に照らされれば、身心共に清淨となり、疲れも休まり、悪い心はなくなつて、命絶つて佛となれるというのである。身意柔順については、阿彌陀佛の四十八願の中の第三十二願として「もしわれ佛を得たらんに、十方無量不可思議諸佛世界の衆生の願にして、わが光明を蒙り、その身に觸れん者は、身心柔順にして人天を超過せん……」とある。佛教でいう無我無心とは、正しく、身心の固定しない、融通無礙の状態をいうのであれば、このような身心柔順こそ、佛教者が求める眞の心境とすべきであり、それが佛の光明によつて得られるということとは、佛の力がいかに偉大であるか分る。

大智度論第四十二に「光明に二あり、一に色光、二に智慧光」とあり、その他、華嚴經探玄記第二、瑜伽師地論第十一などに説明してあるところを要約してみると、大體、佛教では、光明をば物理的な光線、原理的法則、あるいは内心的・内面的な智慧といったものにまで擴大されていることが知られる。そして、これを最後までいきつめて行つたところに、「火三昧」という教えがみられる。

火三昧というのは、「身より火光を發する三昧」のことであるが大畏婆沙論第七十七卷には「その時、かの佛は尼師擔をとり、路に隨つて先往し、既に山上に至りて吠瑠璃龍に入り、尼師擔を敷き結伽趺座して火界定に入り、七晝夜を経て妙喜の樂を受け、威光熾烈たり」と述べている。このような三昧が實際に行われた場合、茶毘毘毘に入るといわれ、「火界三昧に入りて般涅槃す」と大樂涅槃經卷下にいわれているとおりでである。茶毘とは現在では火葬のことになっているが、ここまで来れば、火の物語りもそろそろ終りにしてよ

いようである。

ただ最後に一言、火はものを照らすばかりでなく、ものを焼きつくす作用もあり、これが悪用されればとんでもないことになるが、善用されれば、これまた全くありがたい功德を生む。華嚴經第七十七卷、入法界品に「善財は法燈をもすに、信を炷とし、慈悲を油とし、念を品とし、功德を光として、三毒の暗を滅除す」とあり、同じく第七十八卷には「善男子、たとえば一燈、闇室に入らば百千年の闇、ことごとくよく破盡する如く、菩薩摩訶薩の菩提心の燈も、またまたこの如く、衆生の心室に入らば、百千万億不可說劫の諸の業煩惱、種々の闇障は、ことごとくよく除盡せん」とある。

涼しかるべき一夕の物語。かたくりしくてさぞかし暑くてお困りだつたと存じ、深くおわびします。

(三〇頁よりつゞく)

を、今元Tが居た室の前で「マンデー」して居る水の音が聞こゆるので、のぞいて見たら、右肩に大きな傷あとのある、あの特徴のある身體を持つたTが後ろ向きの裸體姿で「マンデー」をして居るのを見た、確に魂が歸つて元の居室に入つて居ると云つて、おじけて居る。自分のみは助かるかも知れぬ、と最後まで思つて居つたTが起居してた室へ歸つて來のたろうと當時死刑囚房に居つた人達が考へたのは事實だ。其後出た話は聞かないが、私は此語を聞いてTよ安らかなれと供養し回向の念佛を申した。

對幽靈念佛

私は幽靈よりも、親しい同じ職場の友を不幸に落し入れんと考へたり、或は關係無き人に突然傷害を加えて、つまらぬこの欲望満足を得んと考へて居る、生きてる人間の方が恐ろしく、むしろ幽靈は恐ろしいとは思はない念佛の聲のする所には、よく出て來た幽靈も歡喜勇躍して極樂へ歸る事を信じ且體驗して居る。(終り)

奈良の大佛と 法然上人

中 村 賢

歌舞伎の名優、先代幸四郎の辨慶、菊五郎の義經、羽左エ門の戸樫を演じた、勸進帳を四五年前映畫で見たことがあるが、流石に名優の演技は立派なものだと思つた。

この本物の勸進帳、すなはち南都東大寺が治承四年平清盛の命を受け平重衡が放つた兵火で炎上したのを、後白河上皇が残念に思召され再建をはかられたのであつた。しかし庶民の淨財にまつ此の再建は大事業であるから其衝にあたる人は世間で信用もあり精力絶倫の人で無ければならぬ。朝廷はいろいろ評議の後、法然上人が一番よろしいと言ふことになり、右大辨藤原行隆朝臣を勅使として大觀進職になるようにとのことであつた其時の模様を「三國高僧傳」に

宣旨に曰く、南都の佛法滅亡の條朕愁歎に思ふところ、上人いかでか同心せざらんや賊徒等七大寺を亡すといへども、餘はしばらくさしをく、東大寺はこれ先皇の御願なり、十六丈の盧舎那佛一時に破滅す、御身量震襟として置ところなく思しめす、早く上人鑄仕を加へられ宜しく佛閣を建立し佛像を建立し佛像を安置せられれば、朕が善悦のところ也、先奉加し奉るとなり、

源空宣下の趣き聞き召勅答申されけるは御宣恭く仰せ下さるといへども、源空山門の交りを遁れ、幽に住居いたすことは閑に佛道を修し、念佛を勤行せんが爲なり、且は年齢つづまり來て、造營その期を辨へず候ふ、就中山林籠居の身に斯る大勸進も憚り甚しく候自餘の貴禪房へ仰せ下され候ふべしと、固く辭退申されけり、法皇源空の御答を聞召、押して仰せ下されけるは、弟子等の中に然るべき器量の徒あらば、指圖申されよとなり。源空まうさく、若し俊乘房重源と申すもの此職を承るべきかと存じ候とありければ即ち勅使ありて重源を召さる頃て參内仕る、是によつて大勸進に補せらる。

此の時代の概観は「平家物語」などにより世間周知のことであるが、平氏の全盛より滅

亡までの二十餘年間の重なる出來事を見ても生者必滅會者定離の佛語がはつきりして居る人心を救済する役目の僧侶も何等見るべきものもなく徒らに勢力争ひに日を送り、清盛が大政大臣になつた翌年は高野山の衆徒が根來寺を焼き、翌々年の嘉應元年には延暦寺の衆徒が藤原成親を訴へ成親を流罪にせしめた。兼安元年には興福寺衆徒が京都に入り嘯訴、兼安三年には再び入京した。治承元年には延暦寺衆徒入京、二年には延暦寺内の堂衆と學徒と職ひ、三年に祇園僧と清水寺の僧と戦ふ。こうゆう際法然上人が専修念佛を唱へ始められたのである。

俊乘坊重源は宋へ留學し歸朝してから法然上人の弟子となつた人である。

東大寺の炎上した治承四年には二月安徳天皇が賤詐せられ、五月には源三位頼政の舉兵八月には源頼朝の舉兵、鎌倉に入り九月には木曾義仲が舉兵した。夫れから五年目に壇の浦の戦で平氏は滅亡した。

奈良の都に營まれた天平時代の寺院の廣さは九町乃至十二町前後に及び、更に周圍には康大なる附屬地を有するものであつた。其の中でも東大寺の規模は最も雄大なもので、現在の大佛殿は江戸時代の元祿年間に改築せら

れ規模が著しく縮少せられたとはいへ、猶世
界第一の木造建築である。毎日新聞記者が屋
根瓦の一枚が一間もあつて驚いたと言つて居
た。孝謙天皇の天平勝寶年間に設立した大佛
殿は、十一間七間重層入母屋造、その正面二
十九丈、側面十七丈、高さ十五丈六尺であつ
た。

法然上人に宣下せられた時のものは、單に
大佛殿のみでなく、金堂、講堂、戒壇院、來
迎堂、鐘樓、經藏、佛閣寺、聖殿寺、鎮守、
拜殿、湯屋、大透牆の諸建物で、平和の時代
でも大變の仕事であるのに、戦亂つづきで人
民は疲弊して居る際に寄附金をあつめると言
ふ事は容易ならざることであつたろうと察せ
らるるのである。俊乗坊が其の大勸進職を受
けられた、治承五年改元して養和元年には、
伊勢大神宮に詣で三七日の間參籠し、我此度
の重職わたくしの名利にあらず、偏に伽藍草
創の爲なり、何とぞ速に成就圓滿せしめ給へ
と丹誠を抽で祈請をこめられたと言ひ傳へて
居る。これは聖武天皇の大佛御鑄造のとき行
基を伊勢神宮に御遣しになり、神意を仰がし
めたまひし先例を學んだものだらうと思ふ。
俊乗坊は元久二年に八十六歳で示寂して居
るから養和元年には六十二歳である。これは

終戦前までの裁判官、大學の先生の停年の歳
に相當するのに此の大任を引受け爾來十餘年
間一輪の車を作り身軀を容れる丈の大さと
し、諸國を勸進するのに、少しも人に寄附金
を強ふるといふことをなさず、人々が隨喜し
てだす金ばかりを集められたと言ふことであ
る。東京の何會とかが赤い羽根の募金を猫ば
ばしたと言ふのと大變なちがひである。

「日本地名辭書」に

東大寺は治承四年平氏の兵放火して大殿
燬け佛像頭壞れ、建久六年再興落慶あり後
鳥羽天皇臨幸源賴朝監護す傳重源勸進僧榮
西幹事たり、とある。

僧榮西幹事とあるは禪宗の祖榮西禪師を指
すもので、俊乗坊は支那の留學中建仁寺の開
山榮西禪師と遇ひ相伴つて天臺山に上り、歸
朝のときも一所であつたのである。この當時
は佛教は廣義のものであつて現今の如く宗派
觀念はなかつたようである。

俊乗坊の木像は、三重縣阿山郡阿波村大字
富永新大佛寺にある、同寺には芭蕉翁の句碑
もある。天正年間の兵火で荒廢したのを、寛
永年間に再興したもので、句碑は高さ三尺、
幅三尺五寸、

表面に曰く、

伊賀の國阿波の庄に新大佛といふあり、此
ところはならの都東大寺のひじり俊乗上人
の舊跡なり、ことし舊里に年をこえて舊友
宗七宗無ひとりふたり誘ひ物してかの地に
至る、仁王門撞樓のあと枯れたる草のそ
こにかくれて、松ものいはば事とはむ石居
ばかり童のみしてと言ひけむもかかるけし
きに似たらむ、なほ分入りて蓮花臺獅子の
座なんどは、いまだ臺のあとを残せり、御
佛はしりへなる岩窟にたたまれて、霜に朽
ち臺に埋まれてわづかに見えさせ給ふに、
御ぐしばかりはいまだつつがなく上人の御
影をあがめ置きたる草堂のかたはらに安置
したり誠にここらの人の力を費し、上人の
貴願いたづらになり侍る事も恐しく、涙も
落ちて、談もなく、むなしき石臺にぬかづ
きて、

丈六に陽炎高し石の上 芭蕉桃青

と讀まれる。

終りに會津八一氏の歌を借用する

東大寺にて

おほらかに もろて の ゆびを ひらかせ
て おほき ほとけ は あまたらし たり

幽 靈

山 田 隆 元

幽 靈 の 話

夏の夜、夕涼みの縁台で、空飛ぶ流れ星についての話も早盡きて、手許にある螢籠の光も鈍くなり、先き程まで庭先の垣根に鳴いて居った虫の音も静まる頃ともなれば、幼ない子も縁台の上で、うたたねをして居る。どうやら大人も眠むくなる頃、此頃に出る話題に幽霊の話がよく出る。

幽 霊 の 實 在 性

(29)

幽霊の話は洋の東西と古今を問はず澤山あるが、此世に幽霊有り、と云ふ人と、そんな事は無い、と云ふ兩論に別れるのが常だ、然し此問題は未だに論證實驗す可き方法がない

故體驗の有無によりて別れると思う。

「幽霊の正體見つけた
り枯尾花」と古歌にある如き場合もあるが又數人の者が同時に幽霊を發見して騒いだ例も多い。

結局必ず有るとも云へず、と云つて決つて無いとも云へぬものである。

私は幽霊には不幸にして遇つた事は無いが幽氣に或は夢に死者に會いて肉身や友人の死を察知した事は經驗して居る。

幽 氣

和昭廿年の一月、爪哇に於て、十一人の軍關係の人を殺傷した三人組の暴漢があつた。

其内一名は搜索隊に發見されて、右の大腿部を射たれて逃げ逐せず、兵舎裏の林の中で自決して居るのを、死後二十時間經て發見したが、他の二名の所在判らず、兵舎の外遠く迄で探がしたが歩いた形跡無く三日目の夕刻、日もとつぶり暮れた八時半頃私はふと思いついて兵舎の中を一通り歩いて見た時、身に「ぞ

つ」と感ずる薄暗い廊下の隅に一部屋、此翌數ヶ月開けた事の無い部屋があるのを發見し此部屋の鍵を保管している下士官に鍵を出して呉れと云つたら彼の机の抽出しにある可き鍵が見當らず持出した覺も無いと云うので、愈々怪しく思い合鍵を探して、萬が一を考へて數人集まり、其部屋の扉を開けてみたら、一昨日來探してた残りの二名が枕を並べて鐵鉋自殺をして居つた。是は幽氣に觸れたものと思ふ。私の前に數人の人が此廊下を歩いて居るのだが別に感じなかつたらしく私が最初に感じたものか、或は前に通りし人達は感受性が鈍かつたのかも知れぬ。幽氣に觸れし一例として以上を述べて置く。

蘭印「セレベス島」にて

次に戰後戰犯容疑者として苛酷極まる取調べを受けてる最中、昭和二十一年十月四日に自決したと云はれているが或は虐殺されたのかも知れぬ、當時三十四歳の、海軍警部Sの話をして見よう。Sは私達と別の或に呼び出されて一人收容されて居つたので彼の死因については誰も知らず、是を知ろうと監視の兵にたづねても只「マッテイ(死んだ)」と云ふだけで何も云はず、余程固く彼の死因につき

ては所長より口止めをされて居るらしく遂に其真相を掴み得ず、一同に不安に思つて居つた。

Sに關する事件は和蘭側檢察係としては、「インドネシヤ」政策上重要な問題なりとして、命令者等の名を追及して居つたらしいが責任者は皆内地に歸還し結極Sが總代表として責任を執らされたらしく。遂に死刑を求刑されて最早自分は歸れぬと悲しき覺悟をきめていたものとは思はれるが、自殺か虐殺されたのかは判らなかつた。Sの死體すら如何に處分されたかも不明であつた。其後も隨分此事件に關係した者を探してたらしいが遂ひに重要な位置にありし人を知り得ず結極有耶無耶に終つた。然しSは甚だ氣の毒な最初の犠牲者となつた。Sの死は檢察當局も考へる處となり、其後余り苛酷な取扱は差控えられるようになったが虐殺行爲絶無とは云えない。翌十二月になつて和蘭本國より監視兵がやつて來て一部交代した直後の或夜、突然監視兵が騒ぎ出し遂に全員眞夜中に起されて人員點呼を行ひ、武裝した監視兵が懷中電燈をパツパツと照し部屋の内外を入念に何物かを捜すかの如く走り廻つてゐるのも私達には何を捜してゐるのか位ひに考へた、又人員も不足な

く是で寝かすのかと思つたら、一人づつ訊問して屋根に誰か上がつて逃亡を企圖したろうとの事によく話を聞くと「キャンプ」内の或棟の屋根に確かに人が一人立つてゐるのを監視兵が見たとのこと、其夜は暫らくして寝て宣しとなり。

翌日は收容所長が直接に一人一人を調べる仕末、然し誰もそんな者は居らないので犯人が出る筈が無い。竹の柱に茅の屋根と云ふが如き竹と「アタップ」と云ふ椰子の葉で葺いた屋根の棟に大の人間が上れるものでは無いと説明してもなかなか納得しない。

遂に其棟の下に寝ていた者十名が收容所本部に引立てられて幾日経ても歸つて來ず。其内外部作業に出た人によつて、彼等は物凄い重勞に就かされ早朝より夜遅くまで虐使されてゐる事が判つたので、これではSの如き最後になつてはと一同が案じ所長に嘆願書を書いた。其結果やつと「クリスマス」の前夜歸つて來たが、顔面は殴打されて紫色に腫れ上がり殆んど片目は潰れるばかりの者もいる、衣類は破れて身體は泥だらけ、食物もろくに與へず勿論「マNDER」(水浴)等はさせず、土間に寝かされ、實に慘虐な扱を革鞭の下に過ごされたとの事である。是が自ら文明人と云う

彼等のなせし行爲だ。此問題は是でけりがついたが、全く理由無き懲罰を連座罰として受けたのだがSの死後間もなくSの居た棟の屋根に人が立つたと云ふのだから、これは無念の涙を吞んで獄死せしSの靈が元居つた棟に歸つて來たのであると皆は考へた。此話は當時Sと同じ收容所に居た人Kが「バタビヤ」市の「チビナン」刑務所に於て話した事實だ。幽霊事件と云つて今も時々話がある。

畫出た幽霊

あと一つの話は爪哇の「バタビヤ」にて私達の收容されてた「チビナン」刑務所から銃殺刑場の在る「グルドグ」刑務所へ死の四十八時間前に移された、元「バタビヤ」憲兵隊の關係者七名の處刑が、昭和二十二年十二月三十日の朝六時から各人別に刑木にくくられて一時間に亘つて和蘭兵十名によつて行はれ中に、Tと云ふ當時三十一才の憲兵少佐があつた。此人は多くの在「バタビヤ」支那人より敬慕されて居たので彼の判決が死刑と發表されるや等は等の人から多數の助命歎願書が出たのであるが、その甲斐も無く處刑された。Tが處刑されて一週間後の或日、死刑囚房の監視兵が午前十時と云うのに寝ぼけて居るの

新しい寺

深川長専院の場合

深川、三好町にある長専院不動寺は、正本
實乘氏の寺坊であるが、新しい寺としては、
劃期的な存在である。

堂々たる長専院の正面から入ると、豪壯華
麗なコンクリート式建築物に壓倒される位の
本堂である。よくもまあこれ程のと思うが、
和昭二十五年に出来たと言うこれは、五百萬
程度のものであると言う。しかし、新しい寺
院と言うのは、この近代建築の本堂を指すの
ではない。この同じ寺の住職正本氏が、又
「正本堂」と言う佛具屋の主人であると言う
ことである。

別掲挿繪にある如く、この寺は江東區役所
通りと、靈巖寺前通りとの辻の角にある。一
方の正面は正本堂の玄関であるが、他の一方
の正面は、長専院の玄関である。そして正本

歩く。そして、そしてこの寺の収入は、本堂
の建築さえ殆んど檀家の世話になるよりも、
この佛具商買に依つて爲されたものらしい。

○

この人ならばこそと思われる様な正本氏は
ツヤツヤした顔色をほころびながら苦心談
を聞かされる。

「私は會津の出でしてね。御承知の様に會
津は漆器の産地ですから、これに考え及んで
この商買を考えました。勿論寺が商買するな
どは、一寸考えものなのですが、寺を維持し
發展させる事が住職の本職ですし、こんな角
度で寺を繁榮させるのも、又僧侶の一つの立
場と思つています。」

寺は、檀家を中心として、運営されて行く
僧侶は、その布施を以て生活を維持し乍ら、

氏は、三百餘りの檀家
をかかえながら、片や
佛具屋主人として、八
面六臂の活躍をする。
衣を着て檀家廻りをす
るかたわら、自から佛
檀を背負つて配達にも

寺を守つて行く。これが、當然のことであり
又これを當然として受けとられていた。しか
し、近代文化の流れは、いつまでも、そのま
まにして置かない。僧侶は自己を維持するに
汲々とし、寺さえも忘れてしまう。唯これを
守ると言う消極的なありかただけでよいので
あろうか。そんな角度からするとき、正本
氏の如きは、最も積極的な寺門經營と言う事
も出来るであろう。

「随分忙しいでせうね。」

「忙しい時は仲々忙しいですね。明日も、
静岡の焼津まで行つて來ます。未だ關東一圓
で遠くまで手を廻してはいませんが、清水に
も出掛けて行きます。もつと廣めたいです
よ。」

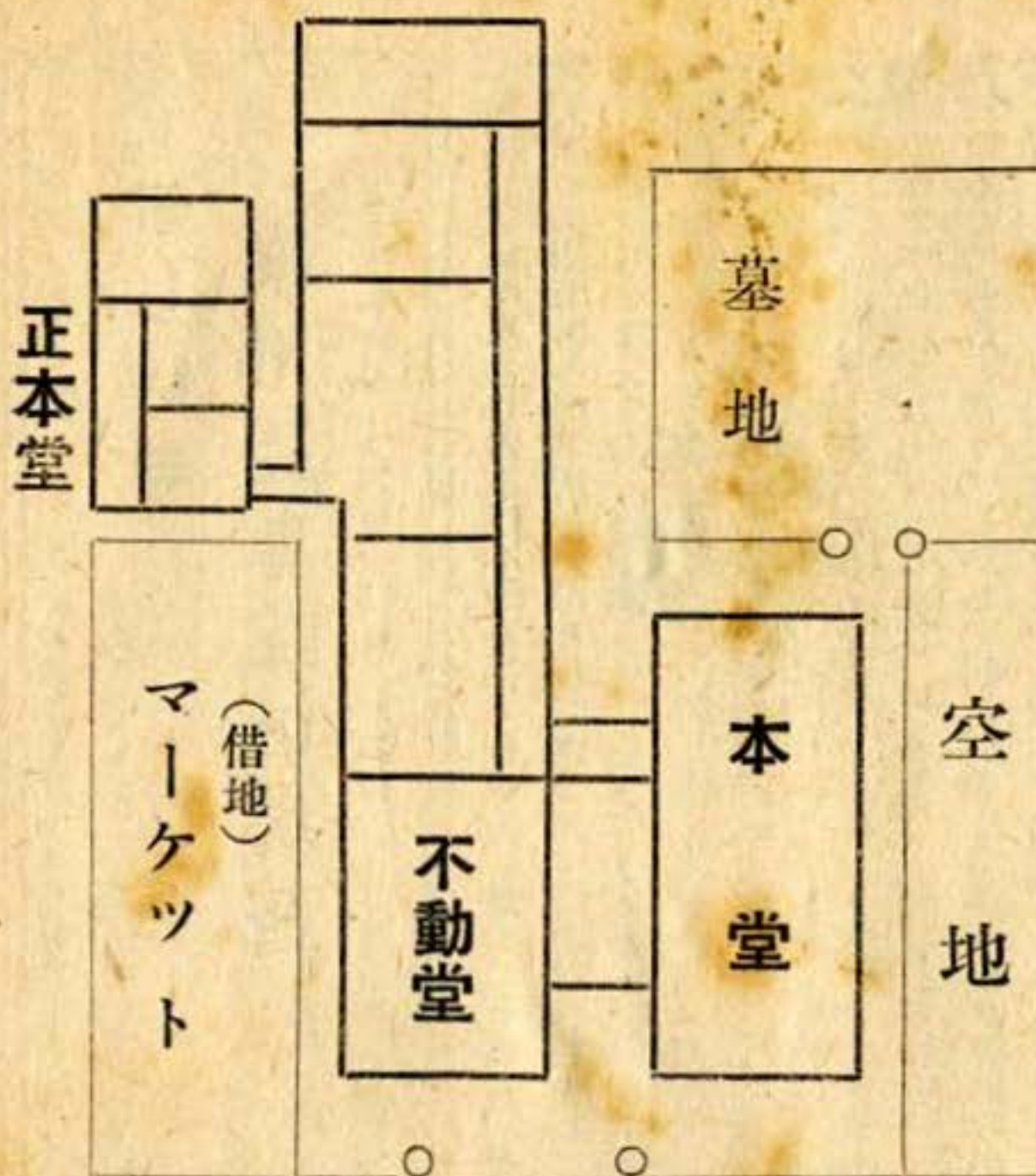
と、仲々の商買氣がある。

「何處で仕入れるのですか」

「主に京都とか、會津からです。もうける
ことを主とする考えより、同人僧侶達の便利
の爲と思つてやつていのですから、忙しい
割にもうけは少いですね。本當は賣り上げの
二割もうけるわけだが、仲々そうは行きませ
ん。檀家に紹介してくれた寺には、一割を呈

する様になっています。同病相あわれむわけですね」
 こんな具合であるから、單に自分の寺だけではない。寺の今日の
 状態からして、何とかせねばならぬ。そうしなければ、共倒れであ
 り、更には、佛教の滅亡でもある。廣い見地からする正本氏の考え
 は、新しい寺の在り方に、一新面目を發揮するものとして、着目す
 べきものであろう。

寺もある意味からすれば、商賈である。上邊だけ美しい様に見せ
 かけても、時代は最早や總てを知っている。そんなとき、積極的な
 この寺のあり方は、種々批判もあるであろうが、そんなことにとら
 われず、どんどん研究すべきである。



芝園だより

○お盆も済んでヤレヤレとは、東京に住む私達の
 こと、関西や地方では、これからというところ。
 折角、御健闘をお願いしています。
 ○お盆のしおり、仲々好評。新しい形とそれだけに経済的操作で苦
 心した甲斐あつての低廉を買って頂けたものと思う。この調子で第
 ニプランをと、清水實相寺の中村康隆氏のところまで、同人類を集め
 ました。無論、先日急逝された御母堂の墓参を済ました後にです。
 ○先日、中村屋の相馬黒光女史の愛孫故防須正秀少尉の沖繩での戦
 死の状況をまとめた「麻文仁の石」を読んで、若き生命を國に捧げ
 た熱情を感じた。いうまでもなく、正秀少尉はインド建國の志士と
 して、日本に亡命し、故渡邊海旭光生等に師事されて佛教を深く信
 奉された故ラス・ビハリ・ボース氏の遺児であつた。因みに黒光女
 史は先頃夫君愛蔵氏を見送られ、目下北多摩に隠棲されて悠々日々
 信仰の道を勵んでおられます。百歳の長壽を祈念します。(竹中)
 ○漢代の史書を見ていると、當時の官僚が墮落をし、汚職をし、互
 いにもみ消しあう姿がよく分る。たまに正義派が居ると、「自殺」
 と言う形で責任をとらされる。釋迦の法も不滅であるが、人間の惡
 態も不滅である。

○ビニール全盛時代である。ビニールの傘をさし、コートを着、ビ
 ニールの袋の中から、ビニールの財布が出て来る。薄くて透き通つ
 て、而も水も漙らさぬと言う。せちからい世情に似ている。「ビニ
 ール人間罷り通る」の態である。○夜間高校生で本當に苦學してい
 る者がいる。志はあつても學費の無い程氣の毒なことではない。戸松
 學瑛氏は、最近その一人に大きな力を與えられた。せちがらい世の
 中で、これは心の温まる話の一つである。(安居)

○お盆のしおりは、本誌の持味をなるべく多數の人に分かつ意味で
 試みられたものであるが、好評で今日も増刷の手配をした所です。
 ○連載釋尊物語に代つて、本誌より藤井先生に一言芳談抄をお話し
 願う事になりました。本津・澁谷・中村各氏は本會會員で、それぞ
 れ長崎・長野・三重に於て活動されております。

○本誌より臨時寫眞訪問を行います。その第一回として珍しい九品
 佛のお面被りの行事を紹介しました。寫眞は、ベテラン賢願先生の
 御令息に張り切つて頂くはず。會員諸氏の御希望に應じ巡りたいと
 思いますし、御提供を頂いても結構です。
 ○七月號雲藤氏記事二三頁下段十七、十八頁の「宗教」は「宗派」
 の誤植でした。(龍海)

寫眞 訪問

東京都奥澤九品佛の

來迎會（おめんかぶり）

（記事本文十一頁）



三佛堂即ち同型の下品堂、中品堂及び上品堂ある中の一。各品、彌陀三體を安置す。

しづくと淨土二十五菩薩の尊面をかぶり、淨土よりのお迎えの様を映現する行道。三佛堂と本堂を結ぶ。



本堂北面より望む之は龍護殿と稱する。

淨土維持會員

◇本會發展のため特に御協力頂く方は維持會員として年額壹千圓の會費を御願ひ致しております。尙入會の方は誌上發表すると共に、出版物が無料贈呈されます。

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓（ π 共）。毎號定價三十圓 π 四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿九年 七月廿五日印刷
昭和廿九年 八月一日發行

（定價三十圓）

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

東京都千代田區錦田町保町三ノハ
東京都港区芝公園五ノ一〇
電話 東京八二一八七番
電・芝（四三）一三二八

お盆の施本

特別普及版浄土

法然上人讃仰會
發行

お盆のしおり

一、體裁……本誌八頁分、表紙付、A5版

二、内容……七月號第一頁より第八頁まで八頁

三、表紙……本誌表紙と同質紙、特に純施本用として表紙は「お盆のしおり」の文字印刷、裏におせがきの案内欄を設く、見返し表紙印刷なし。

一、頒價……一部六圓、五十以上五圓五十錢、百以上五圓、送料四部八圓、百以上五十圓、二百以上無料

信徒必携 一枚起請文

B六、十六頁 價十圓送八圓
五十部以上 上二割引
百部以上 二割引

浄土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上一、八圓
三百以上 五圓
送、五十部 每八圓

大野法道著

五重の話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を伝え、どんないみがあるのか。大野博士が特に平易に解説されたもの。

法然上人讃仰會發行

昭和二十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一圓一日發行)
昭和二十九年七月二十五日印刷 昭和二十九年八月一日發行

第二十卷

八月號

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのぞ
ットで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松谷
・光明・芝等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

銀ブランコ2人乗	¥ 12,000
銀ブランコ3人乗	¥ 14,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太 鼓 橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付

定價金三拾圓(送料別)